

額田寺出土瓦の再検討

Review of the Roof-tiles Excavated at the Nukata-dera

上原真人

はじめに

- ①額田寺の創建Ⅰ（7世紀前半）
- ②額田寺の創建Ⅱ（7世紀中葉）
- ③額田寺の整備Ⅰ（7世紀末）
- ④額田寺の整備Ⅱ（8世紀）

まとめ

【論文要旨】

額田寺では伽藍中枢に発掘のメスが及んでいないために、古代の堂塔にともなう瓦の実体は、ほとんどわかっていない。そのため、偶然採集された瓦など2次資料を主な材料に、額田寺の歴史と性格を検討せざるを得ない。検討に際しての方法論的な原則なども、あわせて言及した。

額田寺の創建瓦である素弁八葉蓮華紋軒丸瓦は、従来「古新羅系」と評価されている。しかし、7世紀前半の日本の瓦の系統論には、解決すべき問題点がある。これに続く瓦は、中河内を中心に分布する西琳寺系列山田寺式軒丸瓦で、斑鳩地域の他の寺院には類を見ない。額田寺建立氏族が大和川舟運と密接に関わっていたことを示す。

出土瓦から、古代額田寺は、7世紀前半に創建され、7世紀末にかなり整備されたことがわかる。この経緯は、法隆寺・法輪寺・法起寺など斑鳩地域の他の古代寺院と同じである。事実、軒瓦の紋様は各寺院ごとに独自の範で製作しているが、7世紀末には法隆寺式軒瓦を共有する「斑鳩文化圏」内の一寺院として額田寺を位置づけることができる。しかし、「額田寺伽藍並条里図」に描かれた額田寺の伽藍は、中門の両側から延びる回廊が金堂にとりつき、中門と金堂の間に儀式空間を構成している。8世紀の平城宮遷都後に成立した伽藍配置である。法隆寺や法輪寺・法起寺など、斑鳩地域の他の寺院の伽藍配置とは決定的に違う。額田寺で最も多数出土している瓦は、外区に唐草紋がめぐる単弁八葉蓮華文軒丸瓦と平城宮系の唐草紋軒平瓦で、これが「額田寺伽藍並条里図」に描かれた伽藍配置の成立と密接に関わる。ただし、その伽藍が7世紀末までに造営した建物を全面的に建替えて成立したのか、それとも旧建物を取り込む形で、伽藍計画に変更を加えたのかは、今後の伽藍中枢部の発掘成果を待つほかはない。

はじめに

本稿では、出土した瓦を主な材料に、古代の額田寺がたどった歴史と、古代寺院である額田寺の性格を素描する。古代額田寺は、中世の忍性による再興を経て、現在の額安寺に至るまで存続する。出土した瓦にも中世以降の瓦が混在し、国史跡となっている額田部窯跡との関係で見逃せない。とくに、近年は関東地方で、茨城県の三村山極楽寺や鎌倉の極楽寺の発掘調査を通じて、出土瓦から忍性の事績が追究されており〔小林 1989, 土浦市博 1997〕, その関連で額田寺の中世瓦の分析が重要な課題となっている。しかし、議論が散漫になるので、今回は平安時代以前の瓦を中心に検討し、中世以降の額安寺瓦については紹介にとどめる。

資料の性格

額田寺では数次におよぶ発掘調査を、奈良県立橿原考古学研究所、大和郡山市教委が実施している〔前園 1979・1980・1986〕。しかし、寺域中枢部に大きな発掘のメスがおよんでいないため、額田寺の歴史を描くのに十分な瓦は出土していない。したがって、発掘以外で偶然に出土し、採集された瓦が無視できない。しかし、偶然出土した瓦は、人の手から手へと渡っていくうちに、出土した場所が不明確になったり、よそで出土した瓦などがまぎれ込んだりする。

奈良県下で保井芳太郎が収集し紹介した瓦〔保井 1928・1932〕は、現在なお、大和の古代寺院を考える基礎資料である。しかし、その後、大規模な発掘調査を実施したのに、紹介された瓦の一部がまったく出土しないことがある⁽¹⁾。もちろん、ある種の瓦が発掘で1点だけしか出土しないこともあ⁽²⁾るので、同様の瓦がたまたま過去に採集された可能性も皆無ではない。しかし、瓦が屋根の葺材で、同一規格品を大量に必要とすることを前提にすれば、採集したという証言自体を疑うべきだろう。少なくとも、その寺院の歴史を考える上で、そのような瓦は単なる混入品と理解せざるを得ない。だから、出土した層や遺構、一緒に出土した遺物がはっきりわかる発掘した瓦を1次資料とするならば、採集したと伝えられる瓦は2次資料として扱うのが、考古学の初歩的原則である。

資料操作の原則

やむを得ず2次資料を扱う場合は、まず史料の由来を検討した上で、歴史復原の素材とする文献史学と同様に、資料批判が必要である。資料批判の結果、事実誤認と断言できなくても、不確実と判断した資料は歴史復原の素材から省くか、その資料に多くを頼った立論を避けるのがオーソドックスな方法である。にもかかわらず、発掘資料ではない2次資料の瓦を扱う場合の原則は、まだ確立していない。当面、私は4つほどの原則をあげたい。

- ①発掘で同じ瓦が出土していれば、すなわち1次資料が存在すれば、2次資料もこれに準じて扱ってよい。発掘で出土していれば、わざわざ採集資料を使う必要はないように思えるが、往々にして、発掘では小片しか出土せず、採集資料が完形品の場合がある。
- ②複数の人が同じ瓦を採集している場合は、その遺跡に確実にともなう瓦と理解してよい。これは、異なる史料に同じ史実が記載されていれば確実性が高い、複数の証人がいれば確実性が高いとい

う論理にもとづく。ただし、複数の書物に同じ瓦が掲載されていても、実はそれが同一個体であったりするので要注意。極端な例だが、同一個体の瓦が、同じ書物の中で写真と拓本の両方で掲載され、2点採集したように解説されていると推定できる場合もある [関野 1928-157・158]。

③採集した人自身の証言が明確な場合、とくにそれが信頼できる研究者なら、1次資料につぐ資料と考えてよい。大規模な発掘調査がほとんどなかった時代に作られた『古瓦図鑑』[石田 1930]は、とくに東京国立博物館の高橋健自コレクションを中心に、日本・韓国の古代軒瓦を集成している。集成に際して、高橋自身が採集したものは「特に資料価値が高い」として、石田茂作は解説の一覧表に○印をつけている。

④ある種の軒丸瓦あるいは軒平瓦が確実な資料とみなせるならば、瓦の組み合わせから見て、それに組合う蓋然性の高い軒平瓦あるいは軒丸瓦も、その確実な資料に準じて扱ってよい。ただし、この原則は、①～③までの状況証拠の原則とは異なり、型式学的解釈（様式論）の領域に踏み込んでいる事は承知しておく必要がある。

なお、出土瓦から寺院の歴史を考える場合は、創建時や大規模な修理時に使った瓦が多数を占めるはずだから、ある種の瓦が出土したというだけでなく、それがどれだけの量を占めるかが常に問題となる。しかし、採集資料で量を問題にするのは、かなり困難である。少なくとも、採集資料をカウントして推論しても、発掘で大量の瓦が出土すれば、その推論がすべてひっくり返るおそれは充分ある。しかし、瓦を検討する主要な目的が、寺院の変遷の解明にある以上、それを覚悟の上で資料操作を行わざるを得ないだろう。

対象となる資料

額田寺で出土、採集された瓦は、現在、地元が保管しているほかに、東京大学・京都大学・天理大学・奈良国立博物館・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良県立橿原考古学研究所・黒川古文化研究所などに分散している。本来は、実物同士を比較検討せねばならないが、一部をのぞき、特定機関の所蔵品を借用して比較検討する余裕はなかった。ここでは、写真・拓本・実測図を通じて、分散した資料を比較検討するにとどめた。採拓時に範傷の位置や大きさをメモしたり、範傷位置を意識的に拡大して写真を撮れば、実物比較によらずとも、ある程度まで同範認定は可能である。また、先行報告や論文で、すでに同範・異範の認定が確定している資料も参考となる。記述に際しては、範傷などで同範が確認できたものは「同範」、同じ紋様でも範が違うことが確認できた場合は「同紋異範」、いずれとも確認できない場合には「同紋」と呼ぶ。

額田寺で出土、採集された瓦を紹介した報告・論文は少なくない。しかし、発掘調査で得られた1次資料で公表されたのは [前園 1979・1980・1986] のみである。戦前に採集された瓦は、[関野 1901・1902・1928] [天沼 1921] [保井 1928・1932] [石田 1930] [岩井 1936] [京博 1974] [京大文学部 1968] などで紹介されたが、[天沼 1921] 収録分と戦後に公表されたもの以外は、[石田 1936] がほぼ網羅している。地元で保管されていた採集資料の一部も [石田 1936] で紹介されたが、[橋本 1957] など、その後加わった資料を含めて詳細に検討した成果が [山川 1993] である。その中では、それまでに紹介された瓦から見た古代の額田寺の変遷も検討している。以下、これらの成果を踏まえて、不確実な資料も含めた額田寺で出土したと伝える瓦を集成し再検討する。

なお、先行報告や論文の図や写真を引用する際には、軒瓦などに型式番号が設定されている場合や、同じ文献の中で通し番号で瓦を解説している場合は、[著者名・発行年-瓦番号]で示し、図版ごとに新規の番号を付している場合は、[著者名・発行年-図版番号(瓦番号)]で示す。すでに示したように、本文中の引用では、京都国立博物館→京博、土浦市立博物館→土浦市博、奈良国立文化財研究所→奈文研、大和郡山市教育委員会→大和郡山市教委などの要領で、著者(機関)名を略記することができる。

①……………額田寺の創建 I (7世紀前半)

手彫り唐草紋軒平瓦 (図V-38)

現在のところ、額田寺の瓦で最も古くまでさかのぼるのは、奈良県立橿原考古学研究所が実施した第2次調査〔前園 1979〕で出土した手彫り唐草紋軒平瓦である。同種の手彫り唐草紋軒平瓦は、葺いた時に、軒に近い場所で瓦当面を正面から見上げられるように、つまり、紋様が近くではっきり分かるように、瓦当面と凹面とが鋭角をなすのが特徴的である。山川が指摘したように〔山川 1993〕、概報の拓本は上下逆転させたほうがよい。この軒平瓦は、法隆寺若草伽藍金堂創建時の軒平瓦(図5-2)と同じもので、聖徳太子が斑鳩宮にともなう寺院として斑鳩寺(法隆寺)を創建したとすれば、7世紀初頭にさかのぼる瓦である。

若草伽藍の手彫り唐草紋軒平瓦には、紋様を切り抜いた型紙状のものを、ピンで留めた痕跡のある「手彫りA」(図5-2)〔奈文研 1992-205~207〕と、その痕跡がない「手彫りB I」(図5-4)〔奈文研 1992-210・211・305〕・「手彫りB II」〔奈文研 1992-208・209〕とがあり、額田寺出土例は前者に属する。法隆寺瓦編年では、「手彫りA」「手彫りB I」を若草伽藍金堂所用、「手彫りB II」を塔所用とする〔花谷・佐川 1991〕。なお、整地の切り合い関係などから、金堂の造営は塔の造営に先行することが判明している。

前園実知雄はひかえめながら、この瓦が出土したことを天平19(747)年に成立した『大安寺伽藍縁起並流記資財帳』にみる羂凝道場の伝承、すなわち聖徳太子が田村皇子(舒明天皇)に託した羂凝道場が、百済大寺→高市大寺→大官大寺と法灯を伝えて大安寺に至ったという伝承と結びつける〔前園 1979〕。額田寺が羂凝道場の後身であるとする説は、平安時代以前にさかのぼらないので、後世の仮託とする意見もある〔福山 1948〕が、聖徳太子の飽浪葺宮に付属する仏堂のような性格を想定すれば、これを首肯できるとする説〔狩野 1984〕もある。

現在のところ、斑鳩地域の他の寺々でも、若草伽藍金堂創建時までさかのぼる瓦は出土していないし、1次資料(発掘資料)であることを重視すれば、前園の想定は決して否定できない。ただし、若草伽藍でこの手彫り唐草紋軒平瓦と組合う軒丸瓦〔奈文研 1992-3Bb・3C・4A〕は、額田寺では出土資料にも発掘資料にもなく、「手彫りA」唐草紋軒平瓦が1点しか出土していないことを考慮すると、これで額田寺創建年次を決定することには躊躇せざるを得ない。

素弁六葉蓮華紋軒丸瓦 (図I-1~5)

手彫り唐草紋軒平瓦を除外すると、額田寺の瓦で7世紀中葉近くまでさかのぼる可能性が強い

は、素弁六葉蓮華紋軒丸瓦である。1～4は、高い間弁が主弁を縁取るように、主弁を一段低く、弁区いっぱいに表示する。間弁の先端は、周縁の立ち上がりに直接つながる。主弁は間弁の稜の高さ近くまでふくらみ、弁中軸に稜線が走る。小さな中房には1+4の蓮子を置く。瓦当は薄手で、飛鳥時代的な特徴を残す。

山川の検討によれば、1と2とは同紋異范である〔山川 1993〕。その認定の根拠となった弁区径や中房径の違いに注目すると、3・4は2と同范と思われる。1は現在の額安寺の南にある明星池北岸で採集したという証言があり〔橋本 1957〕、複数個体を異なる人が採集していることから、額田寺の創建年代はこの瓦で判断してよからう。なお、明らかに1～4とは范が違う5が、伝額田寺出土として奈良国立博物館に保管されている〔奈博 1993〕。中房がやや大きいため、主弁がずんぐりした形になっている。これを含めると、額田寺の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦は計3種5個体となるが、5に関しては伝来経緯を含めて、将来の発掘成果で確認する必要がある。

素弁六葉蓮華紋軒丸瓦を古新羅系とする説

現在、図1-1～5の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦を、古新羅系とする説が有力である〔森 1990, 山川 1993〕。6世紀末～7世紀前半に朝鮮半島の影響を強く受けて展開した日本の素弁蓮華紋軒丸瓦は、古くは百済系と高句麗系との二系統に分けて論ずることが多かった〔石田 1944〕。飛鳥寺創建瓦に代表される百済扶余の瓦とそっくりな素弁蓮華紋軒丸瓦を、百済系と評価することにあまり異論はないが、「高句麗系」と呼ぶ一群あるいはその大部分に関しては、高句麗にまったく同じ紋様の瓦がないことから、百済経由で日本に伝来したと考えて「高句麗百済様式」と呼ぶべきだとする意見〔藤沢 1961〕もあった。また、近年は、この一部を新羅経由と考えると「高句麗新羅系」と評価する意見もある〔亀田 1991〕。

系統論が混迷するなかで、花卉中軸に突線や稜をもつ素弁六葉蓮華紋軒丸瓦を古新羅系と評価する説は、比較的定着しつつある〔森 1990〕。とくに天理市の平等坊・岩室遺跡で出土した素弁六葉蓮華紋軒丸瓦（図1）は古新羅瓦に酷似し〔青木・杉浦 1994〕、素弁六葉であれば古新羅系という認定法に拍車をかけた。額田寺の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦も、その典型として引用されることが多い。

古新羅の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦（図2）と比較した場合、確実に額田寺所用瓦と判断できる1～4は、直径に対して中房径の占める比率がやや小さく、花卉が狭長である。しかし、花卉中央に稜が走る点、中房に1+4の蓮子を置く点、主弁の輪郭を間弁よりも一段低く表現する点など、両者の類似性は否定できない。しかし、素弁六葉という特徴で、系統の評価を下すことには疑問がある。

古新羅の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦は、古くから注目されて

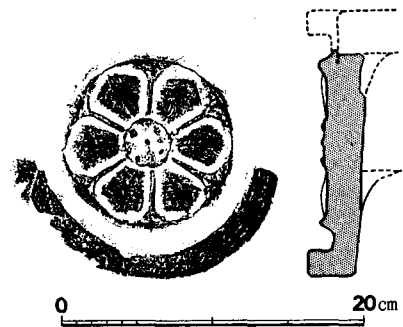


図1 平等坊・岩室遺跡出土の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦
〔青木・杉浦 1994〕より転載

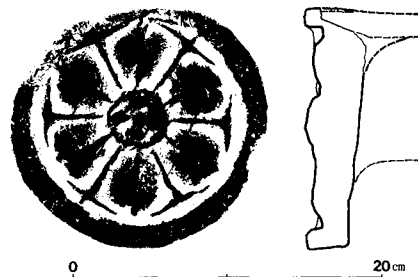


図2 新羅の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦
（京都大学総合博物館蔵）

いた。斎藤忠は、慶州付近出土の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦を集成し、それが百済の影響を受けた紋様であることや、中には統一新羅時代まで年代が下降する崩れたものがあることなどを指摘している〔斎藤 1939〕。また、稲垣晋也は、新羅古瓦の様式を、百済・高句麗様式の系統を引くものと、唐様式の系統を引くものに分け、素弁六葉蓮華紋軒丸瓦（図2）に代表される「花卉に稜線を通した有稜線素弁蓮華文」を「古新羅式としての地位を確立している」と評価しながらも「新羅における高句麗様式の伝来と展開」の項で叙述している。しかし、一方では、「百済における高句麗様式の伝来と展開」の項でも「有稜線素弁蓮華紋軒丸瓦をとりあげて「ここでも八葉から六葉への流れも認められ」る事実を指摘している〔稲垣 1981〕。つまり、古新羅系と評価されている花卉中軸に突線・稜をもつ軸・有稜素弁六葉蓮華紋軒丸瓦は、かつては百済や高句麗に遡源する紋様と理解され、現在なおその理解は正当と考えられる。しかも、六葉であることが古新羅独自の要素ではない事実もすでに指摘されている。

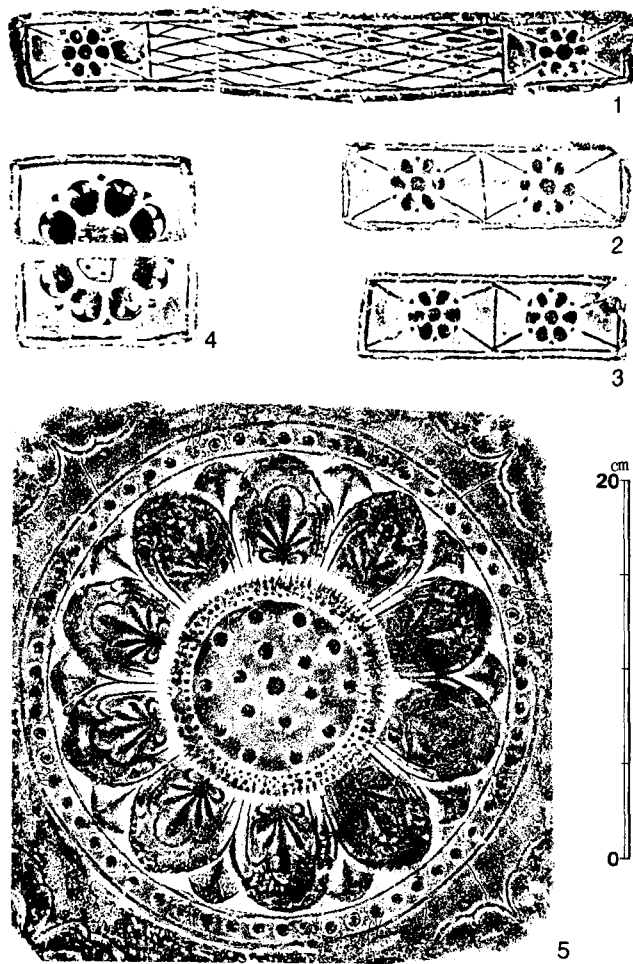


図3 百済墳の蓮華紋の大きさと花卉数
1～4 公州宋山里古墳〔忠南大学百済研究所 1972〕
5 扶余郡窺岩面外里遺跡（拓本回転合成）

紋様の大きさと花卉数

百済中期（475～538年）の王都公州にある宋山里古墳群には、武寧王陵や宋山里6号墳など、中国南朝墓制の影響を受けた埴郭墳が存在する。積み上げた埴の側面や小口面に浮彫りした蓮華紋が、墓室内部を華麗に荘厳する。その蓮華紋の形態は、埴の側面両端や小口面に二つ配する場合は素弁六葉、二つの小口が組合って一つの花紋を構成する場合は素弁八葉である（図3-1～4）。ここでは、明らかに小型の花紋＝六葉、大型の花紋＝八葉という原則がある。また、百済後期（538～660年）の王都扶余の西にある窺岩面外里遺跡で出土した方形の壁埴もしくは敷埴の表面に浮彫りされた大型の忍冬蓮華紋は十葉である（図3-5）。百済の軒丸瓦の大多数は八葉蓮華紋だが、紋様が大きいものには多数の花弁、小さいものには少数の花弁を配するという配慮が一方で認められる。これはデザインの上では、当然の配慮ともいえる〔上原 1996〕。

デザイン上の配慮から花卉数を変える方式は、日本の瓦でも指摘できる。たとえば、奈良県坂田寺で手彫り唐草紋軒平瓦と組合う素弁蓮華紋軒丸瓦は、大型のものに七・八葉、小型のものに六・七葉を配す(図4)。また、法隆寺東院下層で出土した斑鳩宮付属の仏殿所用瓦と想定される小型軒丸瓦は、やはり有稜素弁六葉蓮華紋である(図5-7)。若草伽藍・法隆寺西院所用瓦との関係で見れば、斑鳩宮所用瓦は若草伽藍の最末期に位置づけられる。若草伽藍の軒丸瓦は、創建当初から百済系の素弁九・八葉蓮華紋を採用し、それに手彫り唐草紋軒平瓦を組み合わせるなどの独自の工夫を加えている。手彫り唐草紋軒平瓦は、のちに単位紋様一つを刻んだスタンプを交互に反転しながら連続押捺する方式(図5-6)に変わるが、軒丸瓦のほうは基本的に百済系の素弁八葉蓮華紋の系譜が若草伽藍末期まで続いたと思われる(図5-1・3・5)。花卉はふくらみを増し、その先端は丸みを帯びる傾向があり、斑鳩宮所用の有稜素弁六葉蓮華紋軒丸瓦との連続を暗示する。つまり、斑鳩宮所用の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦は、百済の素弁蓮華紋軒丸瓦の日本的展開のなかで、独自に生まれた可能性も充分ある。ただし、主弁中軸に稜線が走ることや、組合う均整忍冬唐草紋軒平瓦(図5-8)と同範で、顎面にも紋様を施した例(図5-11)があることから、これも古新羅系と推定する説もある。

顎面施紋軒平瓦は新羅系か

斑鳩宮所用の素弁六葉蓮華文軒丸瓦に組合う均整忍冬唐草紋軒平瓦(図5-8)は、瓦当周囲を切り取って一回り小さく作るが、中宮寺の軒平瓦と同範である。ところが、中宮寺例では、顎面に同種の唐草紋を篋描きする。これを顎面施紋軒平瓦と呼ぶ。同じ軒平瓦は、若草伽藍最末期の一群の瓦にもある(図5-11)。顎面施紋軒平瓦は新羅と関係

が深いと言われる。とすれば、斑鳩宮所用の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦も、若草伽藍における百済系軒丸瓦の独自の展開の結果でなく、新羅からの新たな影響と考えることもできる。しかし、新羅の顎面施紋軒平瓦は、いずれも統一新羅時代のもので、古新羅時代にさかのぼる事例はまだ指摘できない。現状では、中宮寺や若草伽藍の顎面施紋軒平瓦も、手彫り唐草紋軒平瓦と同様に、日本で独自に工夫されたと理解せざるを得ない。顎面施紋軒平瓦に先行する「手彫りA」や「手彫りB I」唐草紋軒平瓦が、凹面と瓦当面とが鋭角をなし、通常の軒平瓦よりも軒下に近い位置で見上げること意識している事実は、顎面施紋軒平瓦が発生する前兆とも理解できるだろう。

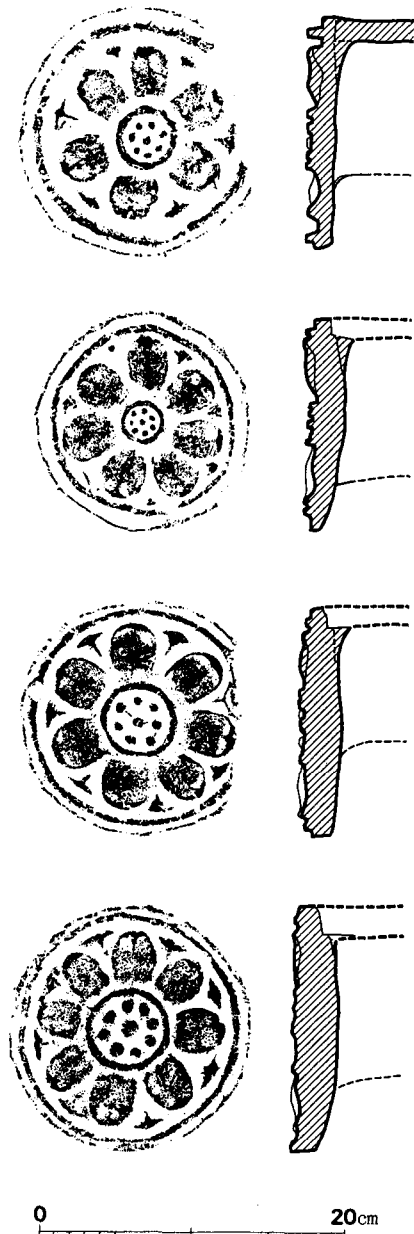


図4 花卉数が異なる同型式瓦
奈良県明日香村 坂田寺出土
[飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1992]

忍冬蓮華紋軒丸瓦が六葉なのは新羅系か

法隆寺東院下層（斑鳩宮）では、もう1種の軒丸瓦が出土し、これも均整忍冬唐草紋軒平瓦に組合う。六葉花弁内にパルメットを浮彫した忍冬蓮華紋軒丸瓦である。これは先述の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦同様の小型品であるが、中宮寺では、別の范から型抜きした大型の忍冬六葉蓮華紋軒丸瓦が使用され、同范例は若草伽藍でも出土する（図5-9）。花卉内にパルメットを置くのは新羅系瓦の特

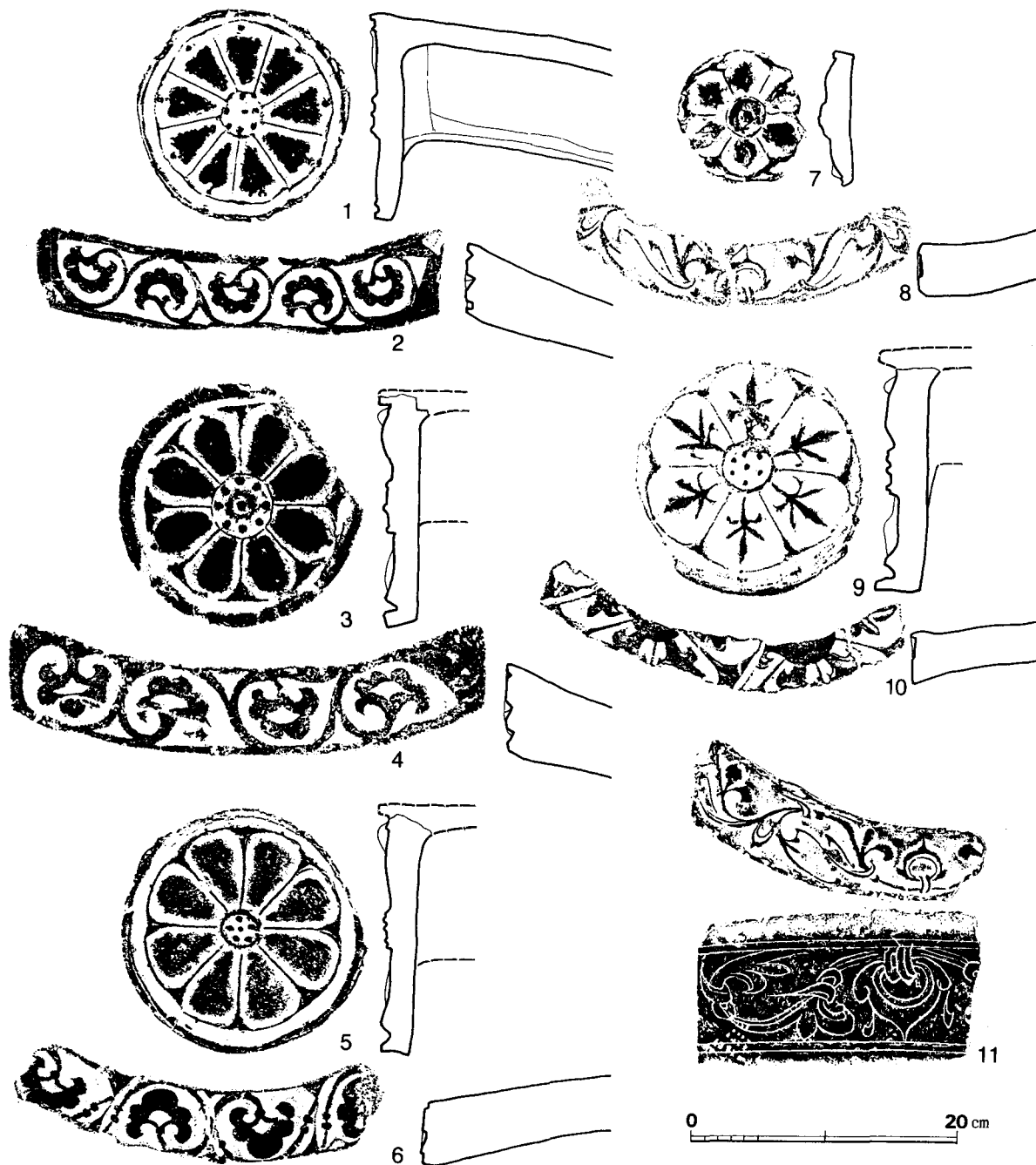


図5 法隆寺若草伽藍・斑鳩宮の瓦 [奈文研 1992] などから作成

1 3Bb 2 206A 3 6C 4 210A 5 7Ab 6 213B 7 2A 8 215A 9 33A 10 214A 11 215A

色の一つとする意見もあるので、忍冬六葉蓮華紋軒丸瓦は新羅系瓦の典型ということになる。

花卉内にパルメットを浮彫にした忍冬蓮華紋軒丸瓦は、三国の中では高句麗が最初に採用したが、先述の外里遺跡の埴（図3-5）や益山弥勒寺の軒丸瓦など百濟後期にも少数例があり、統一新羅の軒丸瓦に類例が多い。しかし、その花卉数は八葉の場合が圧倒的に多く、稀に四葉・六葉・十二葉の例がある。花卉数が多ければ、弁の大きさは小さく、突出した花卉あるいはやや窪んだ花卉上に細い突線でパルメットを表現することが多い。中宮寺・若草伽藍例は、間弁とパルメットを大きく突出させ、パルメット自体を非常に強調したデザインである。この場合、六葉という少ない花卉数を選択したことも、中に置いたパルメットを強調する助けになっている。必ずしもこの系譜下に置くことはできないが、河内野中寺をはじめとして主に河内で展開する忍冬蓮華紋軒丸瓦も六葉であるのは、やはりデザイン上の配慮と見るべきで、まったく同じものが新羅瓦で指摘できない以上、これを古新羅系瓦の典型と評価するのは必ずしも妥当とは思えない。

絵画にも六葉蓮華紋がある

瓦当紋様ではないが、現存法隆寺（西院伽藍）の金堂や五重塔初層の天井格間に描いた蓮華紋も六葉の花弁をもつ。東大寺大仏殿の天井格間の蓮華紋を描いた画師たちは、塗白土（胡粉や白土で下地を塗る）、木画（割り付け？）、塀画（輪郭を描く）、彩色などの各工程を分業的に仕上げしており、法隆寺天井格間の蓮華紋も同様の作業体制をとったとすれば、コンパスだけを使って、機械的かつ簡便に割り付けられる六葉の花紋で全体を統一した可能性もある。要するに、蓮華紋の花弁数は様々な要因で決定されるのであって、六葉花弁を単純に古新羅系と評価するのは、必ずしも妥当ではない [上原 1996]。

額田寺の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦の年代

額田寺の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦は、瓦当径が大きいので、瓦当小型化のために六葉を採用した結果とは評価できない。あるいは「古新羅系」の評価が妥当するかもしれないが、少なくとも古新羅で流行した有軸・有稜素弁六葉蓮華紋軒丸瓦と比べた場合、中房径・花卉径の比率や花卉の形態は、平等坊・岩室例ほど似ているわけではない。ここでは、先述の手彫り唐草紋軒平瓦や後述の法隆寺式軒瓦など、7世紀の額田寺の瓦の系統が、基本的には斑鳩文化圏の傘下にある [森 1983] ことから、斑鳩宮仏殿所用の小型の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦から派生した大型品と理解しておきたい。とすれば、その実年代は若草伽藍の最末期、7世紀第2四半期に近い頃と判断できるだろう。

とくに、6世紀末に日本に伝わった百濟系の素弁蓮華紋軒丸瓦は、以後、7世紀前半を通じて基本的に日本独自の変遷をたどる。そのひとつの方向性として、瓦当径の大型化がある。斑鳩宮仏殿所用の小型瓦は、そうした大型化傾向のなかで小型品を特注したので、六葉花卉が生まれたのかもしれない。飛鳥寺創建時の百濟系素弁蓮華紋軒丸瓦の瓦当径は16cm前後。これに対して、その系譜を引く7世紀第2四半期の軽寺式（船橋廃寺式）軒丸瓦の瓦当径は18cm前後。額田寺の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦の瓦当径は18cm強だから、まさに7世紀第2四半期的の大きさとと言えるかもしれない。

ただし、額田寺の有稜素弁六葉蓮華紋軒丸瓦に古新羅の影響を認めた場合でも、古新羅における有軸・有稜素弁六葉蓮華紋軒丸瓦が、その製作技法から7世紀初頭～第3四半期に展開したとする

稲垣晋也説〔稲垣 1981〕を援用すれば、その実年代は7世紀中葉を大きくはずれることはない。

瓦当文様の起源論・系譜論についての私見

以上、額田寺の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦の位置づけをめぐって、従来の定説に若干の異見を提起したのは、以下のような疑問を常々抱いているからである。それは、7世紀の日本の瓦を理解する場合、直接、その系統や起源を朝鮮半島にすべて求めようとする研究法、すなわち百済系・高句麗系・古新羅系と命名することを自己目的化した研究姿勢は基本的に誤っているのではないかという疑問である。

由来がはっきりしている百済系軒丸瓦ですら、伝播した当初の飛鳥寺創建瓦から、百済扶余の瓦とは花卉数が違っており、その後も、百済とは異なる日本の本州島独自の展開をとげている。それは若草伽藍の場合を見ればよくわかる。7世紀の日本の瓦を理解するには、この変容と展開に注意を払うべきではないか。また、瓦当紋様の創作に、仏師や画師が関与した可能性を認めるならば、朝鮮半島に直接のもとになる紋様の瓦がなくても当然という気がする。それは若草伽藍の手彫り唐草紋軒平瓦を見れば納得できるだろう。とすれば、花卉数などの枝葉末節的な要素で、系統を論ずるのは、場合によっては単なるこじつけになりかねない。

とくに気になるのは、7世紀前半の軒丸瓦の瓦当紋様は、すべて朝鮮半島に遡源するに違いないという先入観である。日本考古学が多くを学んだヨーロッパ考古学の方式に従えば、考古学資料から文化伝播を証明するには、少なくとも

- ①一定の地域における資料を収集し、その地域内でどのように年代・系譜づけられるかを検討する。
- ②その地域内での系譜づけが困難な資料に関しては、隣接地域に祖型となりうる資料を探す。
- ③祖型となりうる隣接地域の資料が、隣接地域で系譜づけられ、しかも年代が先行することを示す。という3つの手続きが必要である⁽³⁾。しかし、現在の先入観による瓦当紋様の起源論の多くは、こうした正規の手続きを欠いたものがほとんどである。

たとえば、山背隼上り窯で生産され、大和豊浦寺に供給された弁間に珠点をもつ有軸素弁八葉蓮華紋軒丸瓦(図6-1・2)は、古くは「高句麗系」と評価され、最近「高句麗新羅系」と呼ばれる。そして、その根拠としてソウルの清潭洞遺跡出土の素弁八葉蓮華紋軒丸瓦(図6-8)⁽⁴⁾を挙げ、朝鮮半島から日本への瓦当紋様の伝播を説く〔稲垣 1981, 亀田 1994〕。しかし、両者を比べると、清潭洞遺跡出土例は隼上り窯・豊浦寺例に比べて弁の形などがはるかに崩れており、しかも、朝鮮半島では他に例がほとんどない。飛鳥寺を初めとする百済系の素弁蓮華紋軒丸瓦が、扶余を中心とした百済地域で顕著に展開するのと大きく違う。一方、日本では、隼上り窯・豊浦寺例を初現として、弁間に珠点のある有軸素弁蓮華文軒丸瓦は、7世紀第1四半期末～第3四半期にかけて、顕著な展開を遂げる(図6-1～7)。このような考古学的事実から、素直に伝播を説くならば、朝鮮半島→日本というルートではなく、日本→朝鮮半島という逆の流れを想定せざるを得ない。

日本→朝鮮半島というルートの可能性

もちろん、考古資料は現在がすべてではないから、将来、朝鮮半島で隼上り窯・豊浦寺例に先行しうる紋様の瓦が出土する可能性も皆無ではない。しかし、現状では、日本→朝鮮半島という逆ル

ートの可能性を探ることも無意味ではないと考える。

日本の古代文化において、朝鮮半島から日本列島の本州島や九州島に渡来した人々がもたらした技術や知識が、きわめて大きい意味を持つことは言うまでもない。しかし、彼らは一方的に日本列島に渡来・居住し、朝鮮半島に帰国することはなかったのだろうか。

史料から判断する限り、その流れは一方的ではなかった。『欽明紀』15（554）年2月条によれば、

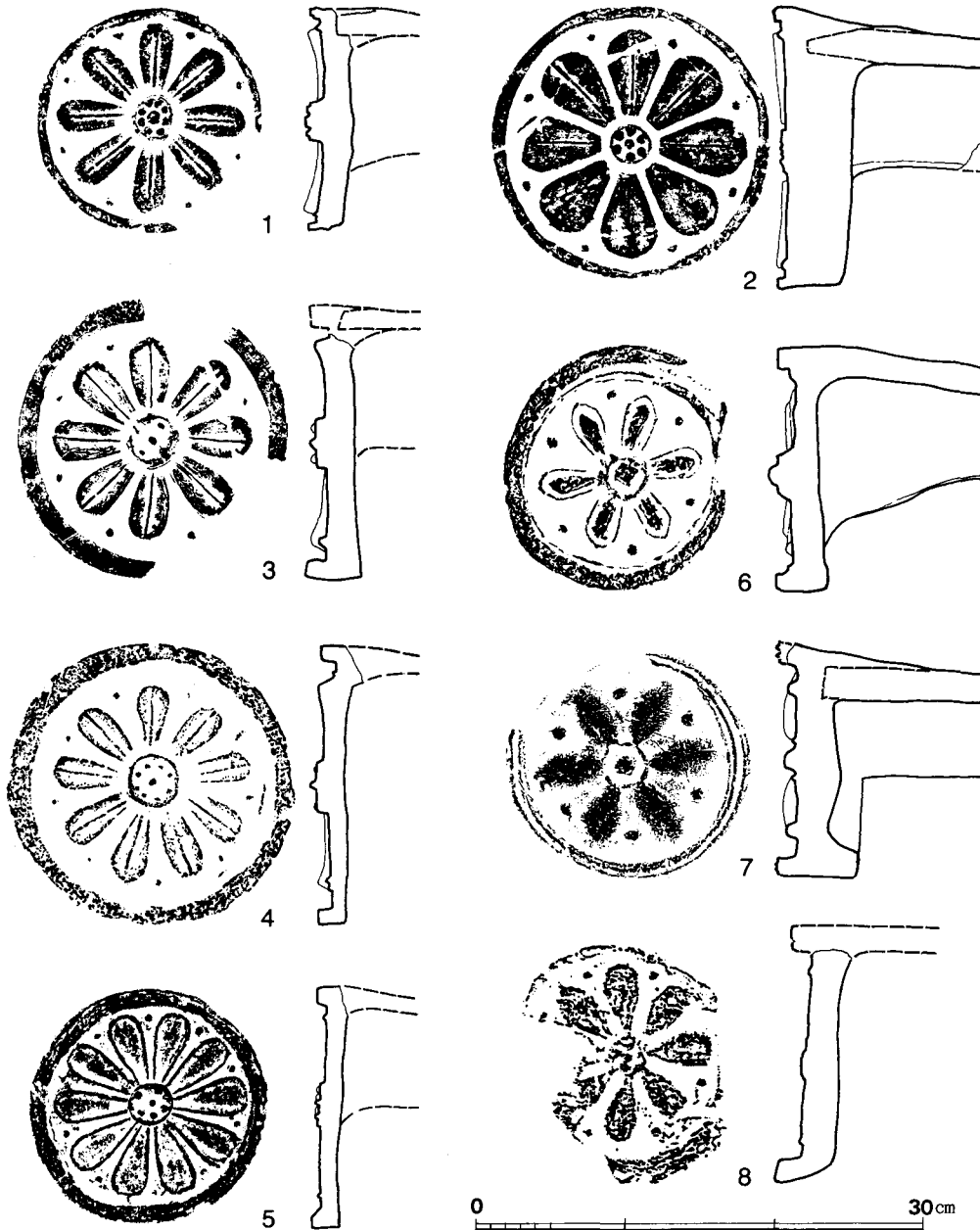


図6 弁間に珠点をもつ「高句麗系」軒丸瓦

- 1・2 京都府宇治市集上り窯 [杉本ほか 1983] 3 奈良県明日香村奥山廃寺 [飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1988] 4 奈良県三郷町平隆寺 [石田 1936] 5 香川県坂出市開法寺 [川畑ほか 1996] 6 京都市北白川廃寺 [梶川ほか 1976] 7 愛知県岡崎市北野廃寺 [稲垣ほか 1991] 8 韓国清潭洞遺跡 [亀田 1994]

来日していた百済の五経博士や僧が交替し、新たに易博士・暦博士・医博士・採薬師・楽人などが来日した。前年6月条では、これらの技術者が交替で上番しており、その交替時期がきたと百済に催促している。『日本書紀』が明言するような上番制度があったかどうかは別として、百済から来日した技術者には帰国した者も少なからずいたことは確実であろう。技術者として来日した者は、おそらく帰国しても同じ技術者であり続けたはずだ。その間、日本で開発し身につけた知識や技術も、以後の彼の活躍の役に立たないはずがない。

新羅慶州の皇龍寺九層塔の造営を、百済の工匠阿非知が指導した（『三国遺事』卷三）ように、朝鮮半島の三国の間にも技術者の交流があったに違いない。しかし、高句麗＝一塔三金堂（飛鳥寺式）、百済＝一塔一金堂（四天王寺式）、新羅＝二塔一金堂（薬師寺式）の伽藍配置が各国で流行したように、三国各国の寺院のあり方は個性的である。そうした個性が瓦の紋様系統を、百済系・高句麗系・新羅系と呼び分ける根拠にもなっている。

一方、日本最初の本格寺院である飛鳥寺（法興寺）は、百済から来た技術者の指導で完成した（『崇峻紀』元〈588〉年条）。それを裏付けるように、創建時の軒丸瓦の瓦当紋様は百済とそっくりである。しかし、飛鳥寺の伽藍配置は、百済ではまだ明確な例がない一塔三金堂の飛鳥寺式で、現状では高句麗に遡源すると考えざるを得ない。法興寺が完成すると、蘇我馬子の長男善徳臣が寺司となり、前年来日した高句麗僧慧慈と百済僧慧聡とが寺に住んだ（『推古紀』4〈596〉年冬11月条）。飛鳥寺は、百済からの技術者の指導で完成したとは言え、百済・高句麗的な寺院だったのである。

寺院造営と技術交流

寺院造営は、各分野の技術者の交流の場である。木工・鋳工・画工・鍛冶工・壁工・石工・瓦工などの各種の技術者は、固有の技術を駆使するだけでなく、他分野の工人の仕事を踏まえて、計画的に作業に従事せねばならない。壁がうまく塗られていなければ、画工は壁画の腕前を披露できないし、木工の小屋組が完成せねば瓦を葺くことはできない〔上原 1996〕。寺院造営の技術を統括した技術指導者は、壁画や仏像の荘厳具、飾り金具や瓦当文様の細部デザインに至るまで、心を砕いたに違いない。斬新なデザインの瓦当紋様は、こうした場で誕生する。

隣接した国同士では利害関係が明確なために交流がままならなくても、異国では同胞として交流が深まるというのはありそうなことだ。京都市の幡枝元稻荷窯では、典型的な百済系軒丸瓦と「高句麗系」軒丸瓦を同じ窯で焼成していた。隼上り窯・豊浦寺の有軸素弁蓮華紋軒丸瓦を高句麗系・高句麗百済系・高句麗新羅系のいずれの用語で系統を示すべきか、私には分からないが、少なくとも、それが生まれた背景には、先進文化であるなら朝鮮半島の三国のいずれからも等しく導入しようとした6～7世紀の日本という土壌と、そこで交流した朝鮮半島仕込みの腕をふるう技術者達がいたと私は考える。

つまり、隼上り窯・豊浦寺の有軸素弁蓮華紋軒丸瓦の紋様構成要素を分解すると、花卉の中軸を走る突線や弁間の珠点などは朝鮮半島（高句麗）に起源を求めることはできても、構成された瓦当紋様としては直接の祖型はない。最も似ている清潭洞遺跡出土例はそれより後出的で、しかも孤例である。日本の豊浦寺造営に参加した朝鮮半島からの技術者がデザインした瓦当紋様にはそれなりの独自性があり、帰国した一部技術者が朝鮮半島でも同じ系統の紋様を採用したが流行しなかった。

というのが真相に近いと私はイメージしている。文化の本流は先進地域から後進地域へ流れるが、後進地から先進地への傍流も存在することは、古墳時代の朝鮮半島南部と日本本州島や九州島との交流からも明らかであろう。また、離れた地域間の考古資料の年代的併行関係を立証するために、両地域でそれぞれ検出した相互の影響要素を型式学的に検討するcross-dating（交叉年代法）というヨーロッパ考古学の方法が発展したことも周知の事実である。

7世紀前半の日本における本州島の瓦当紋様は、すべて朝鮮半島に直接遡源するのではなく、両地域の交流の中で育成されたと理解するべきではなかろうか。少なくとも、7世紀後半における百済・高句麗滅亡後の亡命者の移住、および新羅との新たな国交を模索した段階とは違う政治状況下での文化交流が、7世紀中葉以前の瓦当紋様には反映されているはずである。

額田寺の創建を示す素弁六葉蓮華紋軒丸瓦は、たしかに古新羅に類品が多い。しかし、古新羅における同種紋様の出現・展開過程は十分に解明されたとはいえない。その一部の実年代は統一新羅まで下降するという意見が強いが、それなら、古新羅における素弁六葉蓮華紋軒丸瓦の初現例はどれなのか。それが若草伽藍や額田寺の素弁六葉蓮華紋の直接の祖型となりうるのか。以後、日本の本州島各地に散在する素弁六葉蓮華紋軒丸瓦は、独自の展開の結果なのか。それとも個々別々に伝播したのか。私見のように、日本の本州島で素弁六葉蓮華紋軒丸瓦が発生する機会は認められないのか。花卉中軸に突線や稜線の走る素弁蓮華紋軒丸瓦は、八葉の例も含めれば、高句麗・百済・日本にも分布する。各地域のその出現・展開の時期や過程を分析せずに、「高句麗系」「古新羅系」などの言葉を濫用することは、場合によっては無用の混乱を生みかねない。自戒の意味を込めて、あえて提言しておきたい。

素弁六葉蓮華紋鬼板（図Ⅶ-61）

黒川古文化研究所に「大和額安寺」採集品として、奇妙な鬼板瓦が所蔵されている。約半分を残すにすぎないが、全体がアーチ形をした小型の鬼板で、中央上部に弁端に点珠を置く素弁六葉蓮華紋を突出させ、アーチ周縁に沿って均整唐草紋、突帯で区切ったその内側に凸線鋸歯紋、さらに内側に飛雲紋状の唐草紋を配す。素弁六葉蓮華紋の中房には釘穴があき、裏面では釘穴周囲に沿って、釘を打ち込んだ時の剥離が認められる。

弁端点珠の素弁蓮華紋は7世紀前半の瓦当紋様であるが、アーチ形の鬼板は8世紀の平城宮以降の特徴で、周縁に沿ってめぐる均整唐草紋は、平安時代中期擬古作の法隆寺式軒平瓦（図8-221型式軒平瓦）に近似する。これらの要素で言えば平安中期の擬古作になるが、同期の擬古作には7世紀後半の瓦当紋様を模倣した軒瓦が多く、7世紀前半の紋様要素を含む蓮華紋鬼板の例はない。

胎土や焼成、あるいは釘穴から判断される固定法などを見ても、古代的な特徴を備えている。しかし、弁端点珠の素弁六葉蓮華紋を配するなどの配慮は、近代考古学の成果に基づく擬古作の可能性もある。少なくとも、額田寺で古式の素弁六葉蓮華紋軒丸瓦が出土することや、蓮華紋を配した鬼板が古式であることなどの知識に基づく擬古作と判断できよう。戦前に奈良県などで採集したと伝えられる鬼板には、発掘では破片すら出土しないものがあり、そのいくつかは近代の擬古作と推定されている。本例も、外形や紋様の構成要素から判断する限り、近代の擬古作の可能性を考慮すべきである。

②……………額田寺の創建Ⅱ（7世紀中葉）

単弁八葉蓮華紋軒丸瓦（図Ⅰ-6～8）

素弁六葉蓮華紋軒丸瓦よりもやや新しい額田寺の瓦に、単弁八葉蓮華紋軒丸瓦がある。8と6は保井が紹介したもので、実物照合の結果、同範と確認できた。7は京都大学総合博物館所蔵品で、目録〔京大文学部 1968〕には未掲載。大正5年に購入されているが、当時は出土地未詳だったらしく、後に「大和熊凝寺？」のラベルが添付されている。かつて「額安寺蔵」品として関野貞が公表した拓本に加墨した図〔関野 1901-第11図〕と割れ方まで似ているが、7のほうは紋様が不鮮明で同一個体と確定しがたい。范傷などから8・6と同範と判断したが、実物で照合していない。これ以外に、関野貞が紹介した東京大学工学部所蔵品〔関野 1928-143〕も同紋で、採集資料だけではあるが、少なくとも4点が確認できる。額田寺で一定量使用した瓦と判断したい。

瓦当紋様が比較的鮮明な例で見ると、1+6の蓮子を置いた中房のまわりに、凸線で縁取った単子葉弁を8枚配する。花卉中軸を走る凸線は、子葉をも貫き、中房にまで達する。間弁は楔形で、中房まで延びない。弁区と周縁とは、細い凸線で区画する。内区紋様は山田寺式軒丸瓦の特徴を備えているが、周縁は素縁で通常の重圏縁の山田寺式軒丸瓦とは異なる。

この種の瓦を、私は西琳寺系（列）の山田寺式軒丸瓦と位置づける。山田寺式軒丸瓦は桜井市吉備池廃寺（百済大寺？、639年着工）、橿原市木之本廃寺（高市大寺？）、桜井市山田寺（641年着工）例を初現とし、よく似た紋様の瓦が各地に伝播し、独自の地方色をもった各系列が比較的小地域で分布圏を構成する。上野に分布する上植木廃寺系列、下総に分布する龍角寺系列、駿河東部から伊豆に分布する日吉廃寺系列、山城北部から丹波・但馬にかけて分布する北白川廃寺系列、安芸に分布する横見廃寺系列などである〔飛鳥資料館 1981〕。ただし、基準となる山田寺では同種の紋様が創建時（孝徳朝）ばかりでなく、蘇我石川麻呂の死による中断をはさんで、天武朝の工事再開後も延々と作り続けており、山田寺式軒丸瓦の実年代は7世紀中葉～8世紀初頭の長期におよぶ。

西琳寺系列山田寺式軒丸瓦の展開

西琳寺系列の山田寺式軒丸瓦は、西文氏の氏寺である羽曳野市西琳寺出土瓦を基準とする。西琳寺系列独自の動きとして、

- ①花卉の中軸をつらぬく突線がはしる。
- ②山田寺式軒丸瓦に通有の周縁をめぐる重圏紋帯を省略するものが、古い段階からある。
- ③新しくなると花卉がスマートになって分離し、七葉や六葉のものが現れる。

などの特色がある。額田寺出土例は、紋様だけで判断する限り、西琳寺系列山田寺式軒丸瓦の中でも比較的初現的である。西琳寺系列軒丸瓦については、系統的な整理が深められつつある〔上田 1997〕が、詳細な同範関係などは公表されていない。額田寺の6～8は、西琳寺94-1区一括出土例〔羽曳野市教委 1995〕と写真で対比する限り、すべて異範である。

西琳寺系列の山田寺式軒丸瓦は、堺市（塩穴寺）、羽曳野市（西琳寺・野中寺・善正寺）、藤井寺市（土師寺・葛井寺）、柏原市（大里寺、山下寺）、八尾市（教興寺）に至る中河内を中心に顕著な

分布を示す。南大和では、山田寺式軒丸瓦が出土する古代寺院は少なくない（吉備池廃寺・山田寺以外に、木之本廃寺・安倍寺・奥山久米寺・檜隈寺・田中廃寺・豊浦寺など）。しかし、①の特色をはっきり備えたものは、坂田寺・飛鳥寺で少数出土しているのにとどまり、しかも、花卉がずんぐりして、西琳寺系列のものとはやや違う特色もある。これを除くと、南大和では西琳寺系列の山田寺式軒丸瓦はほとんど展開しない。

7世紀の額田寺は、南大和に対し、若草伽藍や法隆寺を中心とする斑鳩文化圏の一翼を担うと考えられる〔森 1983〕が、法隆寺・法起寺・法輪寺・中宮寺など他の斑鳩諸寺あるいは平隆寺・片岡王寺・西安寺などの平群地域の諸寺を含めて、西琳寺系列はおろか山田寺式軒丸瓦そのものがほとんど出土しない。7世紀代の瓦において、斑鳩地域あるいは大和全域で考えても、額田寺のきわめて特異な一側面を示す瓦と言ってもよい。

広陵町寺戸廃寺の西琳寺系列山田寺式軒丸瓦

唯一、隣の広陵町寺戸廃寺で西琳寺系列の山田寺式軒丸瓦が出土している〔白石 1978〕。寺戸廃寺例は、周縁の重圍紋や花卉中軸をつらぬく突線などに西琳寺系列山田寺式の特徴をよく残すが、小型化した単弁六葉で、額田寺例よりも後出的である。額田寺例とともに、大和盆地の一角に7世紀後半代に中河内と密接な結びつきがあったことを推測させる。両者を結びつけたのは、大和川舟運であろう。

田村吉永は『額田寺伽藍並条里図』にある船墓から、船氏が額田宿禰の先祖だったと想像した〔田村 1938〕。残念ながら、河内船氏の氏寺と言われる羽曳野市野中寺では、西琳寺系山田寺式軒丸瓦は主体的ではない。しかし、『新撰姓氏録』などから、畿内における額田部氏は河内・摂津・山城にも分布し、畿内の主要河川と幹線交通路を結ぶ「額田部連の馬と舟運の両機能に長じた氏族的特質」をその職掌と関連づける説もある〔前田 1991〕。これを西琳寺系山田寺式軒丸瓦の分布と結びつけたいという誘惑は当然生ずる。しかし、瓦当紋様の系譜が氏族系譜に結びつく積極的な証拠はない。少なくとも、同じ氏族の氏寺でも異なる系譜の瓦が使われるし、同じ系譜の瓦が異なる氏族の氏寺で使われた例も枚挙にいとまがない。

山田寺式軒丸瓦については、下総の龍角寺系列を蘇我氏と関連づけた説〔安藤 1980〕、百濟大寺・四天王寺・安倍寺と結んで阿倍氏と関連づけた説〔菱田 1994〕などがあるが、部分資料をとりあげて特定氏族との結びつきを解釈しても、全体資料は整合しない。瓦当紋様の分布は、土器分布と同様の文化圏・経済圏・政治領域などを反映した地域分布のほうが顕著である。問題は地域分布を越えて、同じ系譜の瓦当紋様が伝播した場合だが、それを特定氏族の活動と結びつけるのは難しい。というのは、地域分布圏では複数の氏族の存在を考慮せざるを得ず、その中の特定氏族を伝播主体と推定することに無理があるからだ。また、初期仏教の流布が蘇我氏や上宮王家勢力との関係が深いとしても、原則として、古代日本の仏教文化の伝播には、氏族原理を越えた政治・経済・社会原理が働いたと理解するほうが矛盾点が少ない。私は目下のところ、瓦当紋様の系譜は工房系譜（工人系譜）を示しても、氏族系譜とは無関係であるという基本的立場をとっている。

額田寺における西琳寺系列の山田寺式軒丸瓦も、河内の額田氏などを介在させるよりも、大和川舟運という漠然としたつながりで意義づけるのが無難な理由もそこにある。結果として、額田寺の

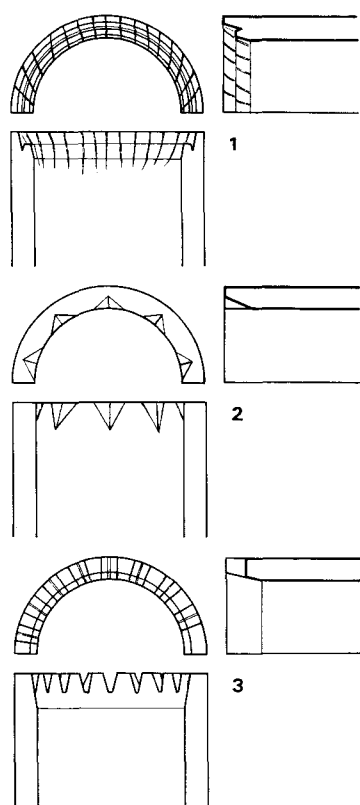


図7 軒丸瓦の丸瓦部先端加工模式図
1 桜井市山田寺東回廊の山田寺式軒丸瓦
2 額田寺の西琳寺系列山田寺式軒丸瓦
3 滋賀県竜王町雪野寺の川原寺式軒丸瓦

建立氏族に、大和川舟運の掌握者という性格を与えることに
変わりはないにしても、である。

額田寺の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦の年代

西琳寺系列山田寺式軒丸瓦の初現は、山田寺式軒丸瓦の初
現と大差ないと考えられている [上田 1997]。紋様だけで見
ると、額田寺の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦も年代が大きく下降す
るとは思えない。実見できたいずれの個体も丸瓦部を欠くた
め、瓦当部接合法などの製作技法からこの年代観をチェッ
クするのが困難である。ただし、図 I-7 では、瓦当上半部の丸
瓦が剥離した部分に、丸瓦先端凹面に刻んだ三角の山形の
圧痕が残る (図Ⅷ-5)。瓦当部と丸瓦部との接合を強化する
ために、乾燥後焼成前の丸瓦部先端に施した加工である。

7世紀代の軒丸瓦における瓦当部接合法に関しては、年代
差と技術系統差とが錯綜するので、直ちに年代を推定する根
拠とならない。しかし、額田寺の西琳寺系列山田寺式軒丸瓦
の場合は、図7-2のように丸瓦部先端を加工したと復原でき
る。他にあまり例のない加工であるが、山田寺式軒丸瓦の製
作技術が一つの技術系統に属すると仮定するならば、山田寺
出土の軒丸瓦における瓦当部接合法の変遷 [花谷・佐川他
1994] のなかでも、片柄式 (図7-1) と楔形の中間的な丸瓦
先端の加工法と言えよう。また、丸瓦凹面側だけに鋸歯状の

加工を施すのは、先端全体を歯車状に加工 (図7-3) して接合強化をはかった7世紀後半の川原寺
式軒丸瓦 (近江雪野寺、大和飛鳥寺、伊勢智積廃寺例) に先行する接合法で、7世紀後半でも中葉に
近い時期の技法と評価できるだろう。同じ山田寺式軒丸瓦でも、河内新堂廃寺例などは丸瓦先端全
体を歯車状に加工しており、山田寺式軒丸瓦にかなりの時期差があることを示す。

額田寺の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦に重弧紋軒平瓦が組合うか

山田寺式軒丸瓦には、重弧紋軒平瓦が組合うことが多い。天理参考館所蔵の額田寺出土瓦 (旧保
井コレクション) に、三重弧紋軒平瓦の小片 (図V-39) 1点が含まれている。山川はこれを西琳寺
系列の山田寺式軒丸瓦 (図I-6~8) と組合わせて編年表を作成する [山川 1993]。しかし、西琳
寺をはじめとする西琳寺系列山田寺式軒丸瓦は、原則として組合う軒平瓦を欠く。最近の西琳寺跡
の発掘調査成果 [羽曳野市教委 1995] でも、良好な西琳寺系列山田寺式軒丸瓦の一括出土例には、
重弧紋軒平瓦は共伴しない。西琳寺系列に限らず、7世紀代の撰津・河内・和泉では軒平瓦を欠落
する場合が多い。たとえば、百濟大寺と同範の山田寺式軒丸瓦を使用した撰津四天王寺でも、重弧
紋軒平瓦を組合わせたのは当初のみで、次に範が移動した和泉海会寺では、軒平瓦を基本的に欠い
ている。なお、広陵町寺戸廃寺でも重弧紋軒平瓦は採集されていない。現状では、額田寺採集と伝

える重弧紋軒平瓦は、小片1点だけなので、図I-6～8の西琳寺系列山田寺式軒丸瓦との組み合わせは保留するのが無難である。

③……………額田寺の整備 I (7世紀末)

法隆寺式軒瓦 (図II-9～14, 図V-40～46)

以上に述べた額田寺の創建を示す一群の瓦に続くのが、現存法隆寺(西院伽藍)の創建瓦を基準とする法隆寺式軒瓦である。9～12, 13・14は、額田寺出土の法隆寺式軒丸瓦(複弁八葉蓮華紋軒丸瓦)2種6点である。10は京都大学総合博物館の所蔵品(白井村治寄贈品)、9は京都国立博物館の所蔵品(竹内コレクション)で、実物照合の結果、同范であることを確認した。11・12もこれと同范の可能性が高い。なお、11は[石田1936-4]の説明では京都帝国大学文学部蔵となっているが、保井コレクションで現在天理参考館が所蔵する。古く関野貞が公表した拓本に加墨した図[関野1901-第5図]の割れ方は10に近似するが、同一個体と確定できない。また、1989年度に大和郡山市教委が実施した垣内遺跡第1次調査(額安寺第5次調査)で、9～12と同紋の破片が出土しており、従来、採集資料しかなかったこの種の軒丸瓦に確実な1次資料が加わった。9～12とは范が異なる13・14は、現在のところ、この2点が確認できるのみである。関野貞が公表した拓本に加墨した図[関野1901-第3図]と写真・拓本で重複して掲載した個体[関野1928-157・158]とは、割れ方が若干違うが、とりあえず同一個体と判断しておく。以上を合わせると、額田寺の法隆寺式軒丸瓦には、少なくとも2種の范があり、7点以上が出土、採集されていることになる。

なお、額田寺出土の法隆寺式軒丸瓦の中で、唯一、瓦当面が完存するために、従来、「額安寺の白鳳瓦」としてよく引用された小型品(図II-16)は、瓦当裏面や丸瓦部凸面にも布目圧痕が付着し、平安京で10世紀に流行した横置型一本作りの製品である。紋様は7世紀的でも、製作技法から判断して、平安時代中期(10世紀)の擬古作と考えられる。10世紀の法隆寺でも、同様の技法による擬古作の法隆寺式軒丸瓦が生産されている[奈文研1992-38A～D]。

各種類を比較しつつ紋様の特徴を指摘すると、9～12と13・14とは、瓦当の直径は18cm前後とほぼ等しいのに、中房径は6.6cm, 7.8cmと後者が大きく、花卉も後者が短小で幅が広く、前者が長く幅が狭い。蓮子数も中房径に対応し、前者は1+8+12, 後者は1+8+16である。弁区を区切る界線と周縁の間にめぐる凸線鋸歯紋帯は前者よりも後者の方が細かい。いずれも突出した中房をさらに凸線で縁取り、全体的に中心に向けてふくらむような紋様である。これに対し、16の擬古作の法隆寺式軒丸瓦は、直径14.7cmと一回り小さく、紋様は平面的である。中房と弁区の比率は、9～12と13・14のほぼ中間値をとるが、蓮子数は1+8+16と後者と同じである。

7世紀末の法隆寺式軒丸瓦(9～14)は、いずれも乾燥後未焼成の丸瓦を瓦当部に接合した接合式である。とくに、10では丸瓦先端の凹凸面に、篋で横に連続する菱形を刻み、接合の強化を図っている(図Ⅷ-6)。同様の丸瓦先端加工技術は、法隆寺の法隆寺式軒丸瓦[奈文研1992-37A・B・C]でも指摘されており、額田寺の法隆寺式軒丸瓦が、紋様だけでなく製作技術の上でも、その系譜下にあることがわかる。10や14は灰色に堅く焼けしまっており、紋様もシャープであるが、9は表面は黒灰色、内部は淡灰色で比較的軟質。紋様もシャープさを失っている。横置型一本作りの16は、

淡灰褐色で軟質である。

擬古作の16は1点だけしかなく、組合う軒平瓦も抽出できない。一方、7世紀末の2種類の法隆寺式軒丸瓦に組合う法隆寺式軒平瓦（均整忍冬唐草紋軒平瓦）を、石田は1種類と認定している。[石田 1936]には、41・45・46以外に小破片3点が掲載され、うち2点は高橋健自の採集品[石田 1930-424・425]、1点は石田自身の採集品という。このほか43は京大工学部建築学教室の所蔵品。44は京都国立博物館所蔵の竹内コレクション。地元で保管され新たに紹介されたもの1点[山川 1993-11]などが採集資料で、ほかに40は額安寺旧境内第2次調査で出土した。写真・拓本で判断する限り、これらは同範の可能性が高く、合わせて10点以上の採集・出土が確認できる。

完成品はないが、各部分の破片を合わせると、中心飾りの火炎宝珠は、ハート形に蓋をしたような形となり、両側の火炎はハート形を包む蕨手に発達する。中心飾りの結節は右に湾曲。ハート形と蕨手の間には、両側に棒状飾りが付く。左右に反転した第1結節・第2結節には、ともに蕾があるが、全体的に紋様の線が細い。

額田寺の法隆寺式軒瓦の年代

先述したように、均整忍冬唐草紋軒平瓦は、すでに法隆寺若草伽藍の末期や斑鳩宮にともなう仏殿で、7世紀中葉までに出現している。しかし、これが複弁八葉蓮華紋軒丸瓦と組み合った典型的「法隆寺式軒瓦」は、現存法隆寺（西院伽藍）金堂創建時である7世紀後葉に成立した。今のところ、額田寺の法隆寺式軒瓦と同範の軒丸瓦・軒平瓦は確認できないが、山川が説くように[山川 1993]、法起寺塔所用瓦[奈文研 1992-37F・217C]との類似性が注目される。

法隆寺式軒丸瓦の基準となる法隆寺西院伽藍創建瓦では、中房蓮子は1+7+11[奈文研 1992-37A・B・C]、あるいは1+6+10[奈文研 1992-37D]が一般的で、1+8+16の構成をもつ37Eは法輪寺、37Fは法起寺からの転用品である。額田寺の1+8+12の構成は例がないが、突出した中房のまわりを凸線で縁取るのも後出的要素と考えられる。

額田寺の均整忍冬唐草紋軒平瓦も、火炎宝珠形の中心飾りが分解しており、ハート形とそれを包む蕨手の間の両側に棒状飾りを付けるのは、西院創建瓦の中では217Cだけである。37F-217Cの組み合わせは法隆寺ではあまり出土せず、西院創建の終わり頃に、法起寺から補足した瓦と考えられている。なお、法隆寺の均整忍冬唐草紋軒平瓦217A・Bもハート形とそれを包む蕨手の間の両側に棒状飾りを持ち、紋様としては額田寺の均整忍冬唐草紋軒平瓦に似ているが、製作技法から平安時代中期の擬古作と考えられている(図8)。

額田寺の法隆寺式軒瓦の採集・出土点数は、7世紀代の軒瓦のなかでも群を抜いているが、素弁六葉蓮華紋軒丸瓦や単弁八葉蓮華紋軒丸瓦が瓦当部をよく残しているのに対し、法隆寺式軒瓦は小片化したものが多い。だから、はたして採集・出土点数が造営工事の規模を素直に反映していると判断してよいのか不安も残るが、ここでは法隆寺式軒瓦の時代、すなわち、法隆寺西院伽藍創建の末期、斑鳩地域で法輪寺や法起寺が伽藍を整えていた7世紀末～8世紀初に、額安寺はかなり寺観を整えたと考えておきたい。

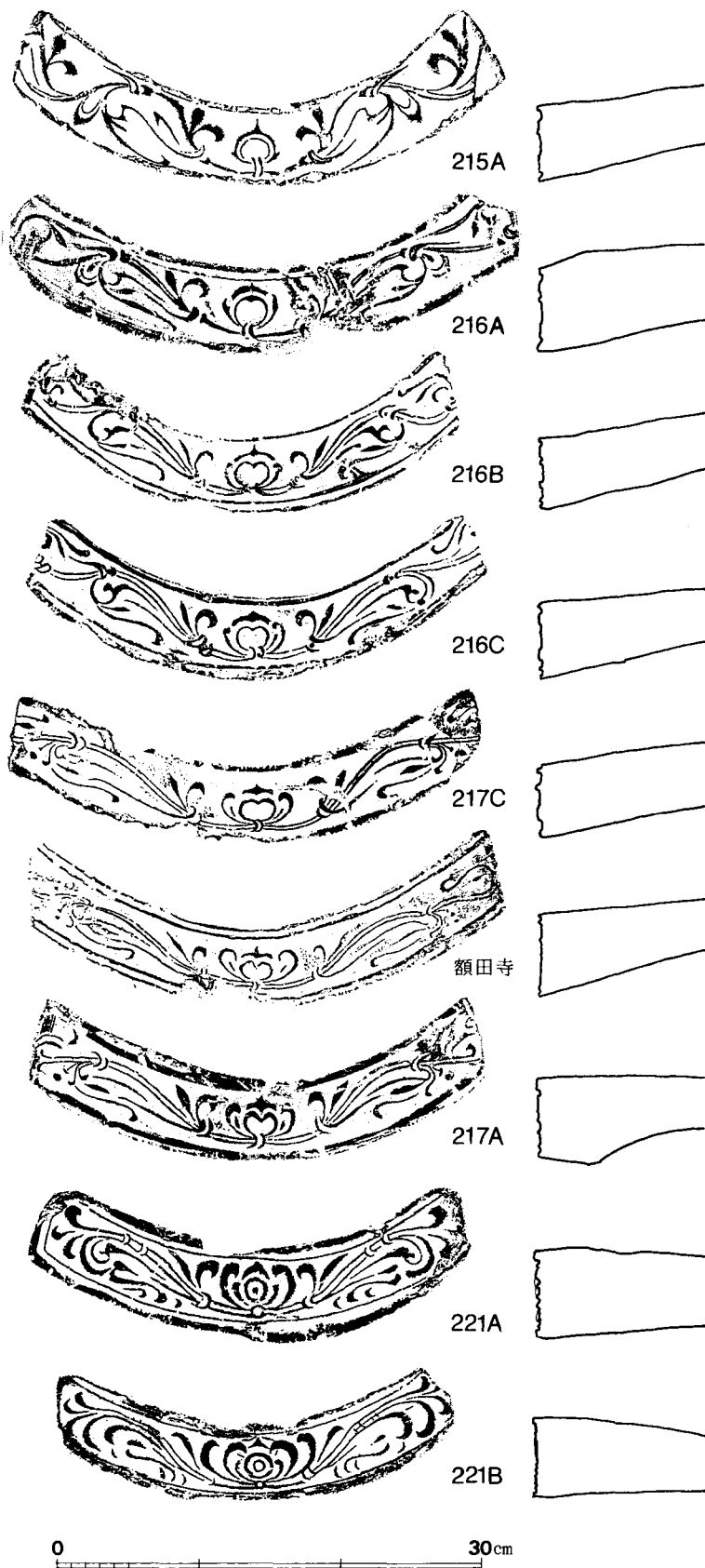


図8 斑鳩における法隆寺式軒平瓦の展開
 [奈文研 1992] などから作成

その他の7世紀末の瓦(図Ⅱ-15, 図Ⅴ-47)

また、ほぼ同時期のものとして、藤原宮式軒丸瓦(図Ⅱ-15)と軒平瓦(図Ⅴ-47)とがある。前者は黒川古文化研究所の蔵品で、裏面の墨書が「覺安寺」となっており、採集地に疑問が残るが、藤原宮6276系に属する。後者は石田茂作が採集したもので、[山川 1993]では6641Nの型式番号を与えている。しかし、軒丸瓦・軒平瓦ともに、藤原宮出土例とは范が違うようだ。また、同范例を確認できない。わずか1点ずつが採集されたにすぎないが、両者が組合うとすれば、今後、額田寺史のなかで積極的に評価すべきかもしれない。法隆寺西院伽藍でも藤原宮式軒瓦が副次的に使用されている[奈文研 1992-44B・225B, 41G・26L]。これらも藤原宮には同范例がないが、平隆寺や檜隈寺所用の藤原宮式軒瓦の転用と認定されている。

また、図Ⅴ-48は、研究者によっては奈良・白鳳時代とも言う。花卉を上から垂らしたような紋様で、平安時代後期に流行する剣頭紋軒平瓦に似ているが、胎土・焼成・作りは古式である。法隆寺出土品として同范例がいくつか紹介されている[関野 1928-379, 保井 1932-図版第47(華瓦27), 石田 1936-図版第103(102), 八王子市郷土資料館 1982-171]。「出所未詳」として、天沼俊一が紹介した例もある[天沼 1921-図版第41(1)]。しかし、法隆寺では確実な出土例はなく、[奈文研 1992]にも掲載されなかった。発掘では大安寺瓦窯[奈良市教委 1997-NH03]や平城京薬師寺[奈文研 1987-293]で出土しているが少量で、主体的に使用した場所や組合う軒丸瓦は不明である。額田寺所用瓦とすれば興味深いが、保井コレクションであるにもかかわらず、保井は自著にこの瓦を掲載していない。当面は検討対象からはずす。

④……………額田寺の整備Ⅱ（8世紀）

額田寺における奈良時代（8世紀）の瓦で量的に主体を占めるのは、平城宮6284系の複弁八葉蓮華紋軒丸瓦（図Ⅲ-17～19）と外区に唐草紋がめぐる単弁八葉蓮華紋軒丸瓦（図Ⅳ-26～30）、および均整唐草紋軒平瓦（図Ⅵ-51～54）である。まず、これら三種の瓦の採集・出土状況について述べ、その組合わせなどを検討し、自余の瓦はその検討を通じて簡単に触れることにする。

平城 6284 系複弁八葉蓮華紋軒丸瓦（図Ⅲ-17～19）

突線で囲んだ中房に、1+6の蓮子を置く。弁区の複弁八葉蓮華紋は、間弁が界線状に主弁をめぐるB系統に属する。外区内縁には珠紋、外縁には突線鋸歯紋がめぐる。山川の検討によって、平城宮や京に同范例はないが、平城宮造営当初に主体的に使用した軒丸瓦6284に似た複弁八葉蓮華紋軒丸瓦と判明した〔山川 1993〕。ほかに〔関野 1928-416〕があり、計4個体以上が確認できる。ただし、〔山川 1993〕が示した2個体以外に関しては、写真と拓本で17と18の同范を確認したが、その他は異范に見えないと判断しただけで同范の確認を得ていない。17は18に比べて紋様がシャープで、製作年代は先行する。発掘資料はないが、他所の寺院跡で同范例が確認できないことなどから、山川が指摘したように、8世紀第1四半期に額田寺専用の瓦として製作した可能性が高い。

唐草紋がめぐる単弁八葉蓮華紋軒丸瓦（図Ⅳ-26～30）

突線で囲んだ中房に、1+6の蓮子を置く。突線で縁取った先端が尖り気味の単弁の間に、楔形の間弁を配す。間弁の中には剣先状のものもあるが、いずれも中房までは延びない。外区内縁には18個の珠紋が巡り、外区外縁の唐草紋は逆時計回りに蕨手二葉がめぐる。ただし、一ヶ所だけ逆向きに対向する蕨手があり、これを除くと、蕨手二葉は11反転することになる。写真や拓本の比較では范の違いを確認できないので、とりあえず一范から成る製品群と理解しておく。ここで図示した5個体以外に、石田茂作採集品〔石田 1936-図版第154（10）〕、地元保管品〔山川 1993-6・7〕や関野貞採集品〔関野 1902-第49図、関野 1928-319〕、高橋健自採集品〔石田 1930-175〕、岩井孝次採集品〔岩井 1936-115〕など、採集資料だけで6個体が紹介されており、第1次発掘調査以外に第3次調査でも1個体が報告されている〔前園 1980-図7（1）〕ので計12個体以上が確認できる。他の遺跡で出土例はなく、額田寺が独自に製作した瓦と判断できる。なお、八王子市郷土博物館所蔵の井上郷太郎コレクションに、伊賀国分寺出土として同范と思われる軒丸瓦が掲載されている〔八王子市郷土資料館 1982-138〕が、誤伝の可能性が高い。

均整唐草紋軒平瓦（図Ⅵ-51～54）

C字上向形にやや特異な花頭形を垂らした中心飾りの左右に、蕨手三葉を各三転する。左右両脇区の珠紋が5個とすれば、上外区の珠紋は15個、下外区の珠紋は16個となる。図示した4個体以外に、地元保管〔山川 1993-13～19、13・19は石田 1936-図版第156（21・22）と同一個体〕の7個体、〔関野 1928-484〕や高橋健自採集品〔石田 1930-461〕、岩井孝次採集品〔岩井 1936-189〕など採集品

だけで11個体が確認でき、第1次～3次調査で報告された3個体(51～53)を加えて計14個体以上が確認できる。現在の資料では異範の存在は確認できず、一範からなる製品群と思われる。他の遺跡での明確な出土例はなく、額田寺が独自に製作した瓦と判断できる。

山川が指摘したように、この軒平瓦には、顎の断面形が段顎のもの(51)と曲線顎のもの(52～54)とがある事実が重要である。パレススタイルの軒平瓦は、藤原宮＝段顎、平城宮＝段顎・曲線顎共存、長岡宮・平安宮＝曲線顎と変化した。したがって、平城宮において、軒平瓦の形態が段顎から曲線顎へ変遷したことは確実である。その変遷の実年代は、恭仁宮大極殿成立時に新調した軒平瓦が曲線顎の初現形態をとることから、宮直属の瓦工房(中央官衙系瓦屋)の製品に限れば、740年以前に求めることができる。額田寺の51～54の場合も、段顎の製品は紋様がシャープで、製作年代が先行することは確実であろう。ただし、曲線顎の製品の中にも、中央官衙系瓦屋の製品に近い断面形をもつ52から、直線顎に近い崩れた作りの54に至るまで差がある。範の磨耗度から判断すれば、これも時期差で、額田寺付属瓦屋としての独自の動向が感知できる。したがって、中央官衙系瓦屋の影響が想定できても、その技術変遷の年代は多少ずれる可能性がある。

8世紀前半の軒瓦の組合わせ

額田寺で最もたくさん出土する瓦は、外区外縁に唐草紋がめぐる単弁八葉蓮華紋軒丸瓦と均整唐草紋軒平瓦であり、これが組合って主体的に使われたことは否定できない。出土・採集資料で両者が数量的に伯仲する事実も、この見解を支持する。

ただし、山川は均整唐草紋軒平瓦に段顎と曲線顎が共存する事実から、その製作が長期に渡ったと推定し、古い段階では平城6284系複弁八葉蓮華紋軒丸瓦と組合い、新しい段階では外区外縁唐草紋帯の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦と組合うという二段階の組合わせを想定している。山川説を積極的に支持する材料も否定する材料も乏しいが、均整唐草紋軒平瓦の珠紋帯は両脇区と上下外区の区別が曖昧になっており、平城宮式軒平瓦の変遷と対比する限り、これを8世紀第1四半期までさかのぼらせるのは躊躇を覚える。平城宮にも同範で段顎と曲線顎とが共存する軒平瓦があるが、それは製作が長期間に渡ったためというよりは、その型式の瓦がまさに両者の過渡期に作られたためと解釈したほうがよい。現状では、6284系複弁八葉蓮華紋軒丸瓦の量は必ずしも多くなく、採集資料だけなので、平城宮で6284系軒丸瓦と組合う6664系軒平瓦(図V-49、山川は6664A?とする)と組合わせておくのが無難であろう。

8世紀の組合わせは大安寺式か

外区外縁に唐草紋帯がめぐる単弁八葉蓮華紋軒丸瓦と均整唐草紋軒平瓦の組合わせを「大安寺式」とする説がある。これが大安寺式ならば、額田氏の出身で大安寺造営に功績があった道慈が、出自の氏族の氏寺である額田寺の整備にも多大の貢献をしたことになり興味深い。しかし、むしろ額田氏＝道慈＝大安寺という先入観から、軒丸瓦図IV-26～30と軒平瓦図VI-51～54の組合わせを大安寺式の範疇に含めようとしたと思量される。

山本忠尚に従って[山本 1984]、平城京瓦型式番号の軒丸瓦6091A・B、6137A、6138C・Eと軒平瓦6712A・B・C、6716C、6717Aなどを「大安寺式軒瓦」と定義する(図9)と、軒丸瓦がすべて

単弁蓮華紋であることや、6091A・Bが外区外縁に唐草紋帯がめぐる以外には、額田寺の瓦が大安寺式軒瓦と似た点はない。とくに、軒平瓦の紋様には大安寺式との共通点は見いだしがたい。なお、近年の発掘調査成果によれば、大安寺式軒瓦は大安寺の僧房で主体的に使われている。天平19(747)年に成立した『大安寺伽藍縁起並流記資財帳』では、僧房は檜皮葺で、それ以降に僧房が瓦葺となったとすれば、大安寺式軒瓦の製作年代は8世紀中葉まで降り、道慈の没年(744年)よりも新しいので[中井1997]、大安寺と額田寺とを瓦の紋様で結びつける必然性もなくなる。

額田寺における8世紀の軒瓦の組合わせは、基本的には平城宮式軒瓦の中から生まれたと理解した方がよい。平城宮式軒平瓦は、C字上向形の中に花頭形を垂らして中心飾とし、左右に蕨手三葉を2～3回反転させる。額田寺出土の軒平瓦51～54は花頭形がやや特異だが、基本的には広義の平城宮式軒平瓦の範疇に含めてよい。

一方の、外区に唐草紋がめぐる単弁八葉蓮華紋軒丸瓦は、山川が指摘したように花卉(主弁)の形は図Ⅲ-21(平城宮6314A型式軒丸瓦)に似ている。6314Aは小型の複弁四葉蓮華紋軒丸瓦であるが、花卉が分離して単弁化しつつも、中房まで延びる間弁を交互に置くことで複弁の特徴を残す。これが単弁化した6314Eとともに、平城宮瓦編年の第Ⅱ期後半(天平年間の恭仁宮から還都する以前)に位置づけられている[奈文研1991]。複弁四葉というやや特異なデザインは、先述した素弁六葉蓮華紋と同様に、小型の瓦当に対応して考案された可能性が高い。額田寺では1点が採集されているにすぎないが、秋篠寺、城陽市の平川廃寺(山城)など平城京外の在地寺院で同范例が出土している。とくにこれが単弁化した八葉のものは、寝屋川市の高宮廃寺、四条畷市の正法寺など、畿内の氏寺で使用される。これらはいずれも間弁が中房まで延び、小型の径を保っている。その目で見ると、額田寺の外区外縁唐草紋帯の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦の内区(花卉区)の径は、6314Aと大差なく、瓦当径を大きくするために外区外縁に唐草紋帯を付加したと解釈できる。とすれば、平城宮式軒丸瓦のなかでも、在地の氏寺で多用された紋様系統の軒丸瓦をもとに、独自の工夫を加えたのが8世紀における額田寺の軒丸瓦図Ⅳ-26～30であると言ってよいだろう。

以上の解釈を認めるならば、外区外縁に唐草文帯を加えた単弁八葉蓮華紋軒丸瓦の実年代は、天平年間以降となり、「額田寺伽藍並条里図」が成立した天平宝字5(761)年以前とすれば、大安寺式軒瓦の成立年代と大きく隔たることはない。大安寺式軒平瓦の断面形が段顎であることが、中井公の論考[中井1997]以前には、これを8世紀前半に比定する根拠となっていた。製作技術変遷の時間的なずれが、中井が指摘したように中央官衙系瓦屋と寺院付属瓦屋の違いに起因するならば、額田寺で組合う軒平瓦が段顎から曲線顎に変遷した時期も、8世紀中葉と考えると大きな矛盾はないだろう。次項で述べる鬼瓦の年代観も、これを支持する。

南都七大寺式鬼瓦(図Ⅵ-62)

京都大学総合博物館所蔵の額田寺採集と伝える鬼面紋鬼瓦は、図Ⅱ-10の法隆寺式軒丸瓦と一緒に寄贈されている。後者は確実な額田寺所用軒丸瓦なので、62の鬼瓦も額田寺所用と考えてよいだろう。いわゆる南都七大寺式鬼瓦で、毛利光俊彦分類のⅣ式Aに該当する[毛利光1980]。毛利光の検討成果によれば、南都七大寺式鬼瓦Ⅳ式の成立は、天平宝字年間という。大安寺でもⅣ式が出土しているので、道慈との関係で額安寺にもたらされたと説かれてきたが、中井公の検討によれば大

安寺の南都七大寺Ⅳ式鬼瓦はすべてBで、額田寺のⅣA式は大安寺では出土していないという [中井 1997]。

その他の8世紀の瓦 (図Ⅲ-20~25, 図Ⅴ-49・50)

軒平瓦49 (平城宮6664系) や軒丸瓦21 (平城宮6314A) と同様に、額田寺では1点だけしか採集されていないが、平城宮や京と同範の瓦に、軒丸瓦20 (平城宮6318Aと同範), 22 (平城宮6291Bと同範), 23 (平城宮6291Aと同範), 24 (平城宮6316Aと同範), 軒平瓦50 (平城宮6719Aと同範) がある。また、25は平城宮6308系と思われるが、同範の確認はできない。これらは1点だけしか採

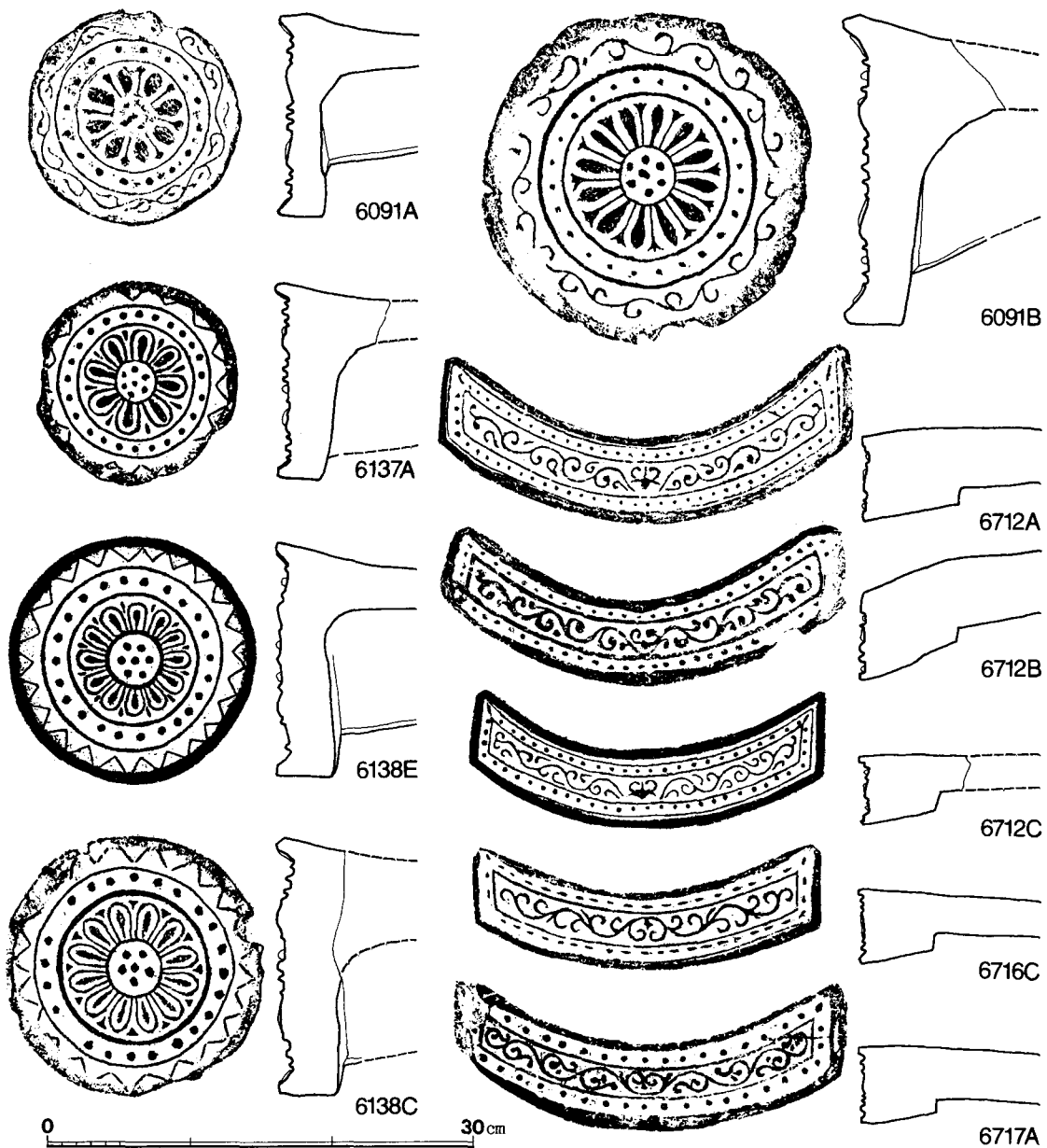


図9 大安寺式軒瓦

集されていないので、評価が難しいが、軒平瓦50(6719A)に関して、山川は平城宮とは製作技術が異なるので、範が移動して額田寺が独自に製作した瓦と考えている[山川1993]。今後、平城宮以外での同範例を確認する必要があるが、22(6291B)は平城薬師寺や城陽市平川廢寺で出土しているが、平城宮内では出土していない。また、20(6318A)は、平城京左京三条四坊十一坪から出土し、平城宮内では出土していない。21(6314A)と同様、平城宮式軒瓦のなかでも、宮・京内のみではなく、京外・大和盆地・畿内一円と使用範囲を広げる傾向のある一群の瓦の存在には注意を払う必要があるだろう。なお、20は図7-3のように、丸瓦部先端を歯車状に加工して瓦当部に接合している。

8世紀以降の瓦(図IV-31~37, 図VI-55~58, 図VII-59・60)

1点だけしか出土していないが、軒丸瓦31は川原寺に同紋例[保井1932-図版第15(疏瓦8), 奈文研1960-pl.45(32)]がある。川原寺で共伴した軒平瓦などから、平安時代前期の瓦と判断できる。同紋の軒丸瓦は豊浦寺[石田1936-図版第18(21)]などでも採集されており、平安時代の大和古代寺院の修復に広く用いた瓦の可能性もある。こうした瓦の背景には、管下の寺院の維持を担った大和国府(国衙)の存在が想定できよう。32・33・34も同様の時期と思われるが、額田寺では同時期の軒平瓦が存在しないのが気かりである。同じく、平安時代後期から鎌倉時代前期までの瓦と思われる35~37も、組合う軒平瓦が存在せず、軒丸瓦も各1点しか採集されていない。軒丸瓦60をはじめとする巴紋軒丸瓦には、55~59などの組合う軒平瓦も存在し、出土量も増す。蓮唐草紋軒平瓦55・59は、法隆寺に同範例がある[奈文研1992-274B]。鎌倉時代後期(14世紀初頭)と推定されており、額安寺を忍性が復興した時期にやや遅れる。

まとめ

額田寺出土瓦と伽藍配置の矛盾

すでに指摘されているように、「額田寺伽藍並条里図」に描かれた額田寺の中心堂塔の並び方(伽藍配置)は、中門の両側から延びた回廊が金堂にとりついて、中門と金堂の間に儀式空間(広場)を構成する。これは興福寺・大安寺・東大寺など、平城宮遷都後に成立した伽藍配置である。にもかかわらず、瓦で見る限り、額田寺の創建は7世紀前半(7世紀第2四半期)にさかのぼり、7世紀末にはある程度整備が進んだ状況を読みとることができる。

このような出土瓦の年代観と伽藍配置との矛盾は、どのように理解できるのであろうか。

斑鳩地域の他寺との比較

7世紀代の額田寺の瓦のありかたは、斑鳩地域にあって法隆寺(若草伽藍・西院伽藍)の影響を強く受けた法起寺・法輪寺などに類似する点と相違する点とがある。すなわち、

- ①朝鮮半島との交流を顕著に反映した飛鳥時代的な瓦(図I-1~5)を少量使った創建期(7世紀第2四半期)がある点は、法輪寺・法起寺などの斑鳩諸寺と共通する。ただし、その瓦は各寺院独自のもので、法隆寺若草伽藍の瓦とは違う。いずれも若草伽藍の成立にやや遅れた時期に創建

されても、創建の事情には各々違った背景が想定できる。とくに7世紀中葉の額田寺に供給された西琳寺系列山田寺式軒丸瓦（図Ⅰ-6～8）は、額田寺の造営背景に大和川舟運を通じて河内と結びついた勢力の存在を明示しており、斑鳩諸寺とは異なる額田寺の側面を伺わせる。

- ②法隆寺式軒瓦（図Ⅱ-9～14，図Ⅴ-40～46）を使って寺観を整えた時期（7世紀末）がある点は、斑鳩諸寺と共通する。法隆寺式軒平瓦は、奈良市山村廃寺をはじめとする奈良盆地東北部でも独自の展開を遂げるが、法隆寺式軒丸瓦と組合って明確な地域分布を示すのは斑鳩を中心とした奈良盆地西部である。「斑鳩文化圏」の提唱〔森 1983〕も、この法隆寺式軒瓦の組合わせの分布を根拠としている。法輪寺や法起寺の法隆寺式軒瓦も、それぞれ独自の範で製作するが、とくに軒平瓦では斑鳩地域として独自の系譜をたどれる（図8）ことは、「斑鳩文化圏」の妥当性を高める。額田寺出土の法隆寺式軒瓦も独自の範で、紋様としては「斑鳩文化圏」内で系譜をたどることができる。ただし、法輪寺や法起寺の法隆寺式軒瓦は、少数ながら法隆寺西院伽藍にも供給された〔奈文研 1992-37E・216D, 37F・217C〕のに対し、額田寺の法隆寺式軒瓦は現在のところ、額田寺以外での出土が確認できない。

このように7世紀の瓦のあり方に類似点があるにもかかわらず、法起寺・法輪寺の伽藍配置は7世紀後半に隆盛した法起寺式・法隆寺式と推定されており、「額田寺伽藍並条里図」に描かれた額田寺の伽藍配置とは大きく異なる。それは、「額田寺伽藍並条里図」の伽藍配置が、出土量で最も主体を占める外区外縁が唐草紋帯の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦（図Ⅳ-26～30）と均整唐草紋軒平瓦（図Ⅵ-51～54）の組合わせの時代に完成したことを示す。7世紀段階の瓦のあり方は似ていても、額田寺の寺観が完全に整うのは、法輪寺や法起寺よりもやや遅れた可能性が高い。事実、法輪寺や法起寺で8世紀の瓦が出土しても、額田寺の26～30と51～54の組合わせのように独自で量的に主体を占めるものはない。法隆寺では8世紀の瓦がまとまって出土するが、これは東院伽藍の造営など、周辺施設の充実に関わるものである。

額田寺伽藍の形成過程についての憶測

7世紀後半に伽藍が整った寺院から、少量の飛鳥時代（7世紀前半）の瓦が出土することがある（大和檜隈寺，山城高麗寺）。堂塔に確実にともなう瓦はすべて7世紀後半のもので、いずれも7世紀前半の堂の存在は確認できない。おそらく、創建時には小堂があり、その全面解体によって新たな伽藍が成立したと見るべきだろう。これを援用すれば、額田寺でも7世紀前半の瓦を主体的に葺いた堂が、「額田寺伽藍並条里図」中に存在しなくても不思議ではない。問題は、むしろ7世紀末の法隆寺式軒瓦の存在と「額田寺伽藍並条里図」に描かれた伽藍配置との間の齟齬である。

「額田寺伽藍並条里図」に描かれたように、額田寺の中心伽藍が条里区画に従っているならば、その伽藍計画自体が8世紀に下降する。大和盆地全体を覆う南北条里は、藤原宮の条坊を覆い隠し、平城宮の条坊と共存するからである。その場合は、7世紀末の法隆寺式軒瓦を主体的に葺いた堂も解体されて、新たな計画のもとに額田寺の伽藍が成立したと考えざるを得ない。

7世紀末までに成立した伽藍を8世紀に全面的に解体して、新たな中心伽藍を造営したと推定できる氏寺として、大和坂田寺がある。坂田寺では、出土瓦から7世紀末（藤原宮式軒瓦の時代）までに、瓦葺の建物がかかり建てられたと推定できる。しかし、発掘調査で瓦が出土しても、同じ時期

の建物は検出できず、確認されたのは8世紀に建った檜皮葺金堂とそれにとりつく回廊であった。

古代寺院では比較的早い段階に金堂を建てるという原則に従えば、7世紀に成立した坂田寺伽藍の中枢部は、8世紀代に全面的に撤去され新造された可能性が高い。もちろん、7世紀段階の伽藍を温存したまま、8世紀に金堂・回廊を新築した可能性もあるが、狭小な坂田寺周辺の地形を見る限り、全面撤去→新造の可能性が高いと思う。同様の事態を額田寺にも適用すれば、「額田寺伽藍並条里図」に描かれた額田寺伽藍の建物は、すべて8世紀のものということになる。

しかし、条里区画にのっているのは単なる図法の問題で、実態とは異なると考えることもできる。「金堂の中心を通る南北線が果たして条里の一坪と十二坪との堺を通る南北線と一致していたかには疑問の余地があり得ると思う。偶然の一致と言うことも考えられるし、少しくずれていても、図の上では便宜一致させるということも有り得る」〔福山 1948〕のである。

少なくとも、図Ⅱ-9～14の軒丸瓦と図Ⅴ-40～46の軒平瓦の組み合わせは、図Ⅳ-26～30の軒丸瓦と図Ⅵ-51～54の軒平瓦の組み合わせについて多数を占める。「額田寺伽藍並条里図」に描かれた堂のうち、一般的に他の建物に先行して造営されることが多い金堂などは、7世紀末の法隆寺式軒瓦の段階で成立した建物かもしれない。とくに、法隆寺式軒丸瓦の額田寺独自の擬古作（図Ⅱ-16）の存在は、平安時代中期に至っても、屋根に7世紀末の法隆寺式軒瓦が葺かれていた可能性を示す。もし、それが7世紀末の金堂が存続していたことを間接的に示すならば、法隆寺式軒瓦段階での伽藍造営計画は、8世紀になって大幅に改定され、最新の伽藍配置にもとづいて塔の造営がなされたことになる。

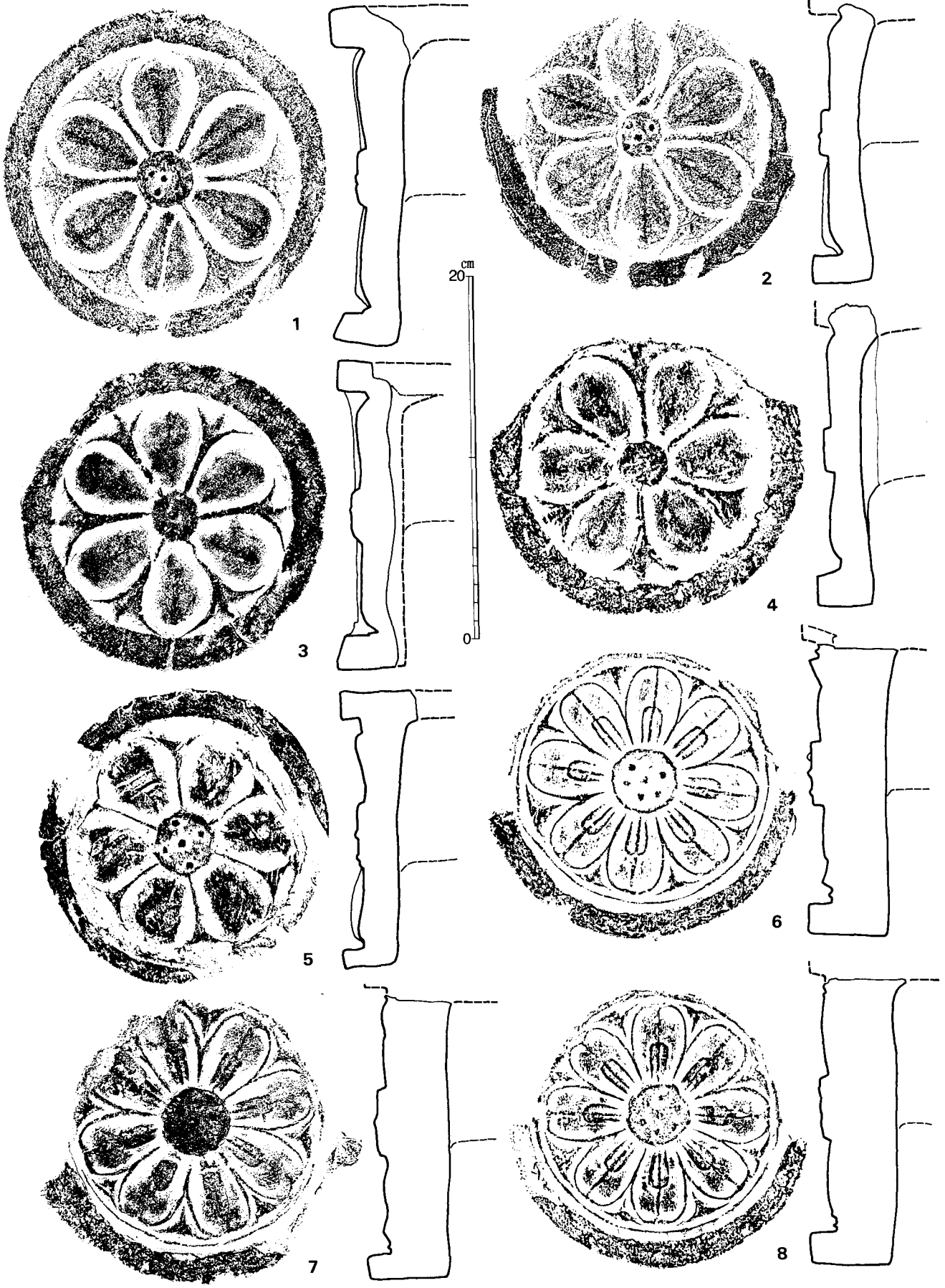
様々な可能性は考えられるが、現状では中心伽藍に発掘のメスがおよばない限り、正解にたどり着くのは困難である。出土した瓦がどの建物にともなうのかが解明されない限り、瓦から描いた寺院の歴史は、建物自体の興亡までは語ってくれないのである。

なお、法隆寺では天平間に東院伽藍（夢殿）が成立する。このときに使われた瓦は、恭仁宮大極殿や平城宮第2次大極殿院閤門などにも使用された瓦と同范である。造営工事に中央の造営担当官衙が積極的に関与した証拠である。同じ8世紀の寺院造営に際して、平城宮式の影響下にあっても独自の瓦を使わざるを得なかった額田寺と、宮の瓦范を使用できた法隆寺東院の格差は、そのまま寺院の格差を反映していると考えてよい。

謝 辞

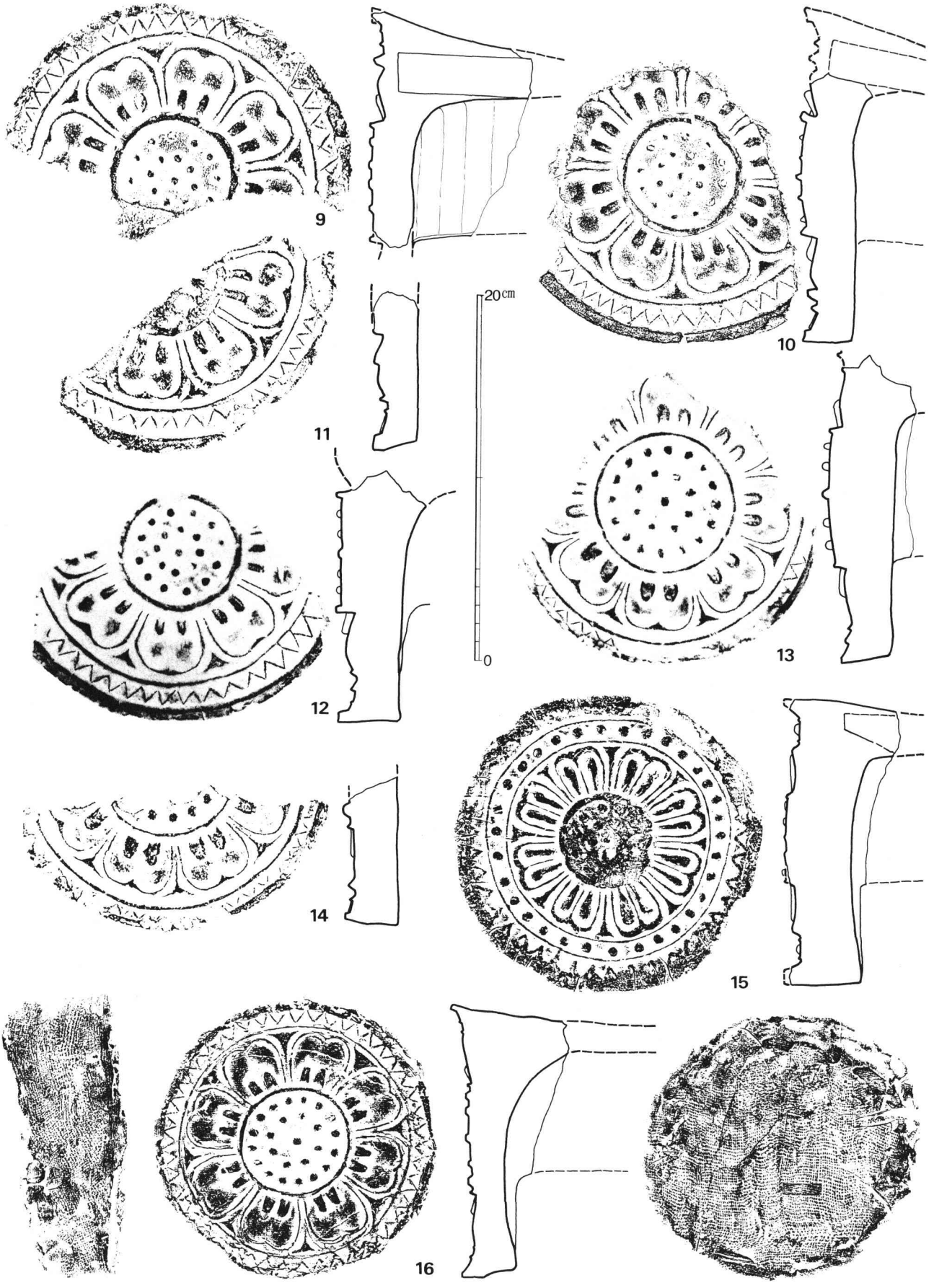
一括出土品のもたらす情報に比べて、採集資料のもたらす情報は不確実であるばかりでなく、貧弱であることが多い。ましてや、それが分散している場合には「労多くして」の結果に終わることは明白である。しかし、額田寺史の解明という共通の目標を掲げている以上、結果がどうあろうと、現在という条件下で調査・検討を進めねばならない。遺漏も目立つが、本稿はそのささやかな成果である。何よりも共通の目標を掲げた仁藤敦史さん・石上英一さんを初めとする研究会のメンバーに感謝したい。資料の実査にはかなり無理をお願いした。とくに天理参考館の太田三喜さん、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の近江俊秀さん、京都国立博物館の難波洋三さん、黒川古文化研究所の西村俊範さん、京都大学大学院工学研究科の山岸常人さんには多大のご迷惑をおかけした。お詫びとともに深く感謝の意を表したい。

(1998年1月4日 脱稿)



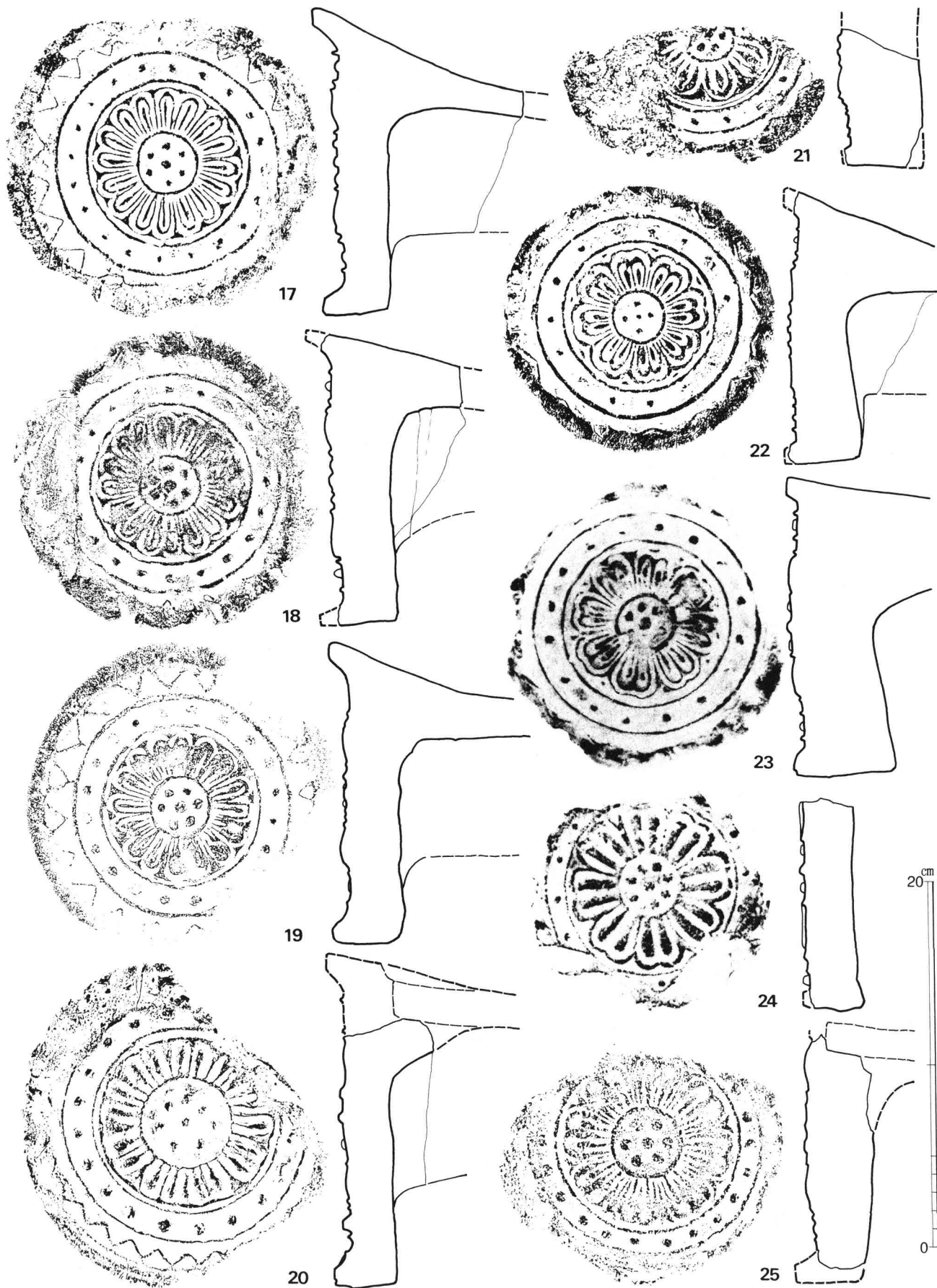
1:3

額田寺出土瓦



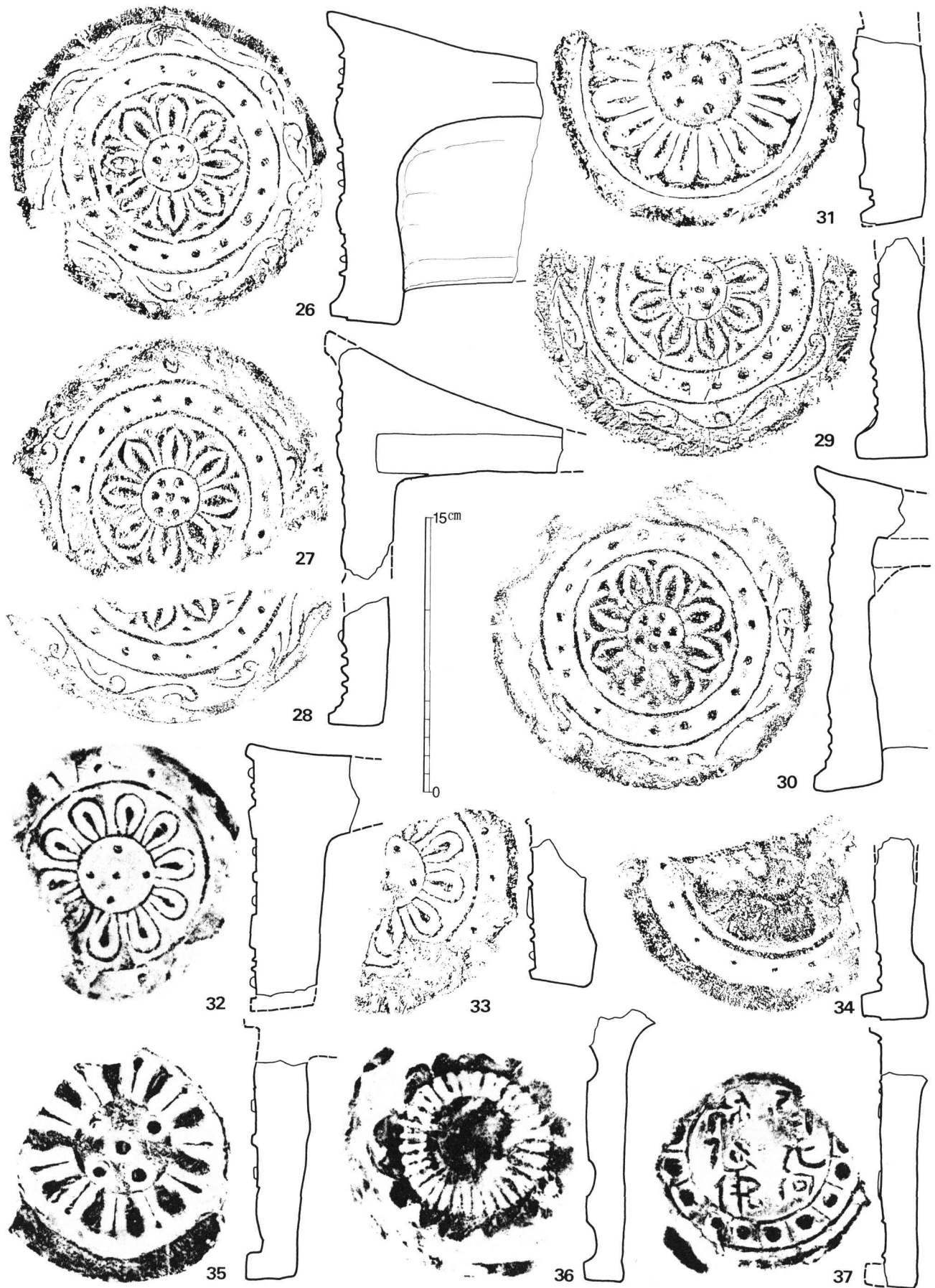
額田寺出土瓦

1 : 3



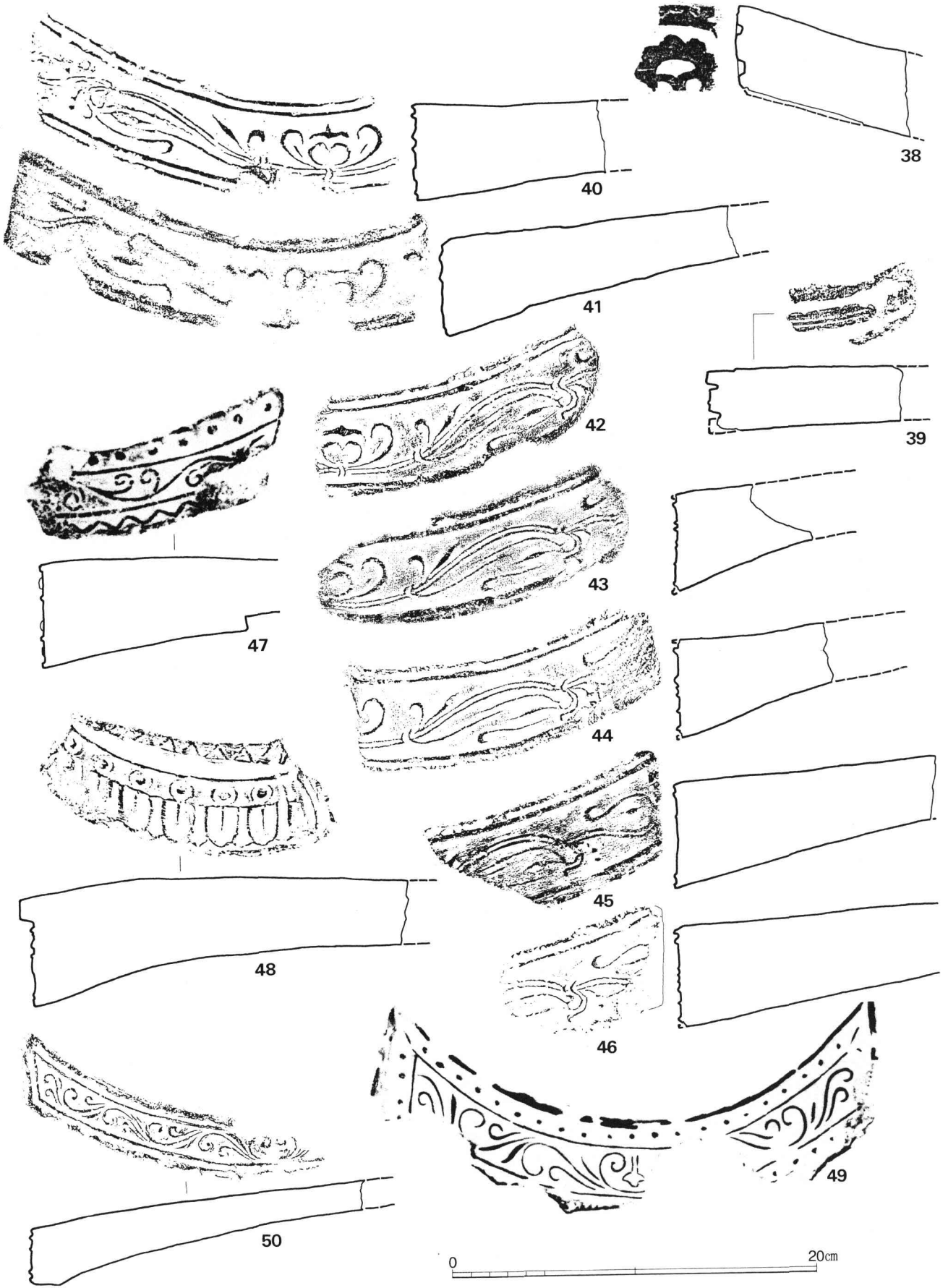
1:3

額田寺出土瓦



額田寺出土瓦

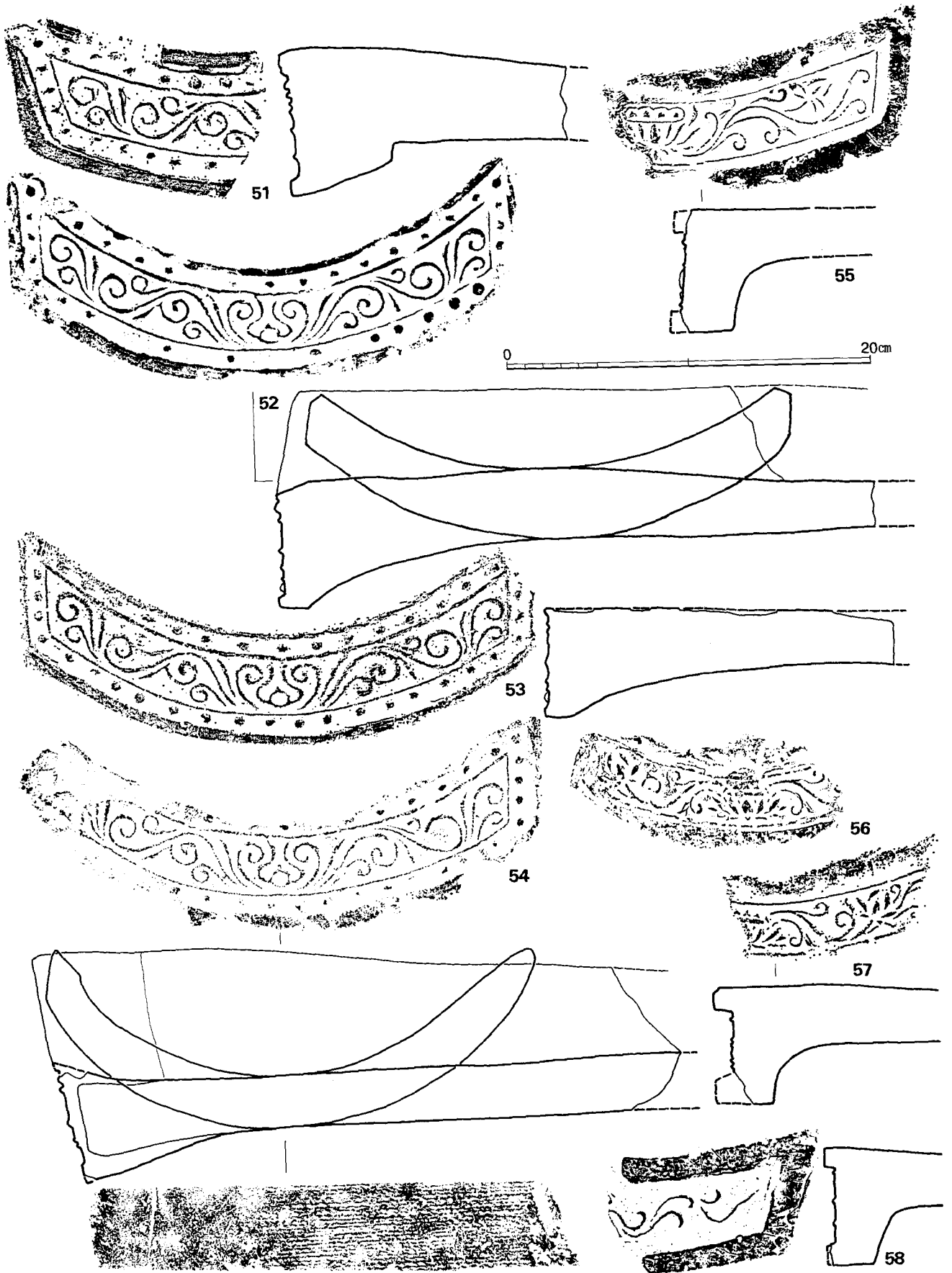
1:3



1:3

額田寺出土瓦

图 VI

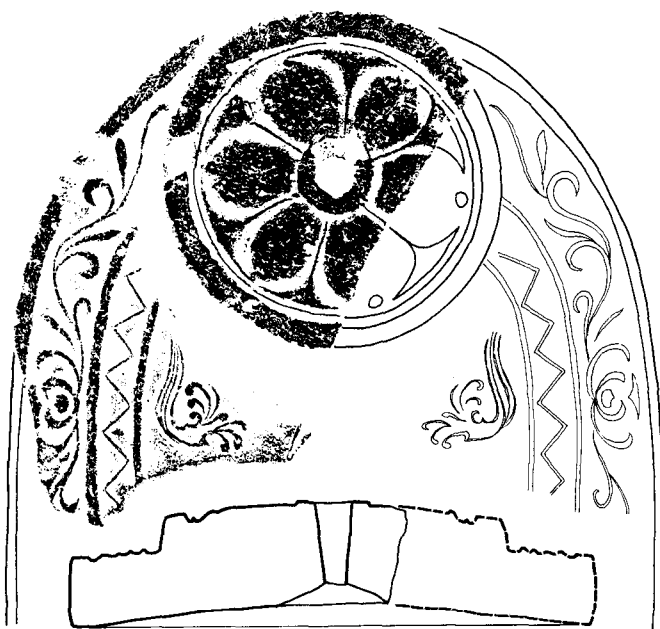


額田寺出土瓦

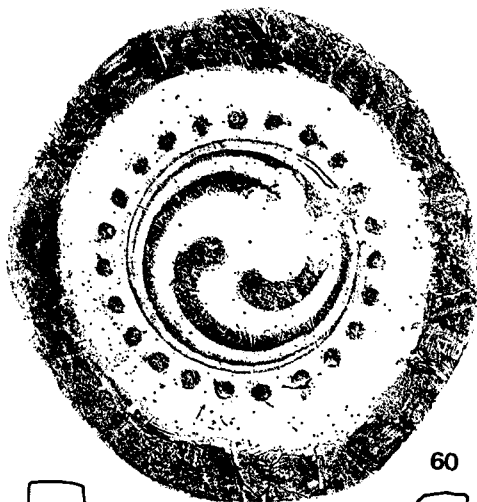
1:3



59



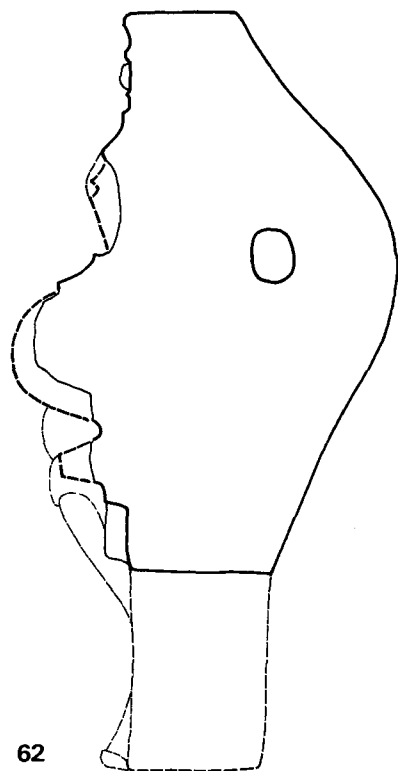
61



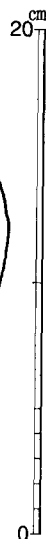
60



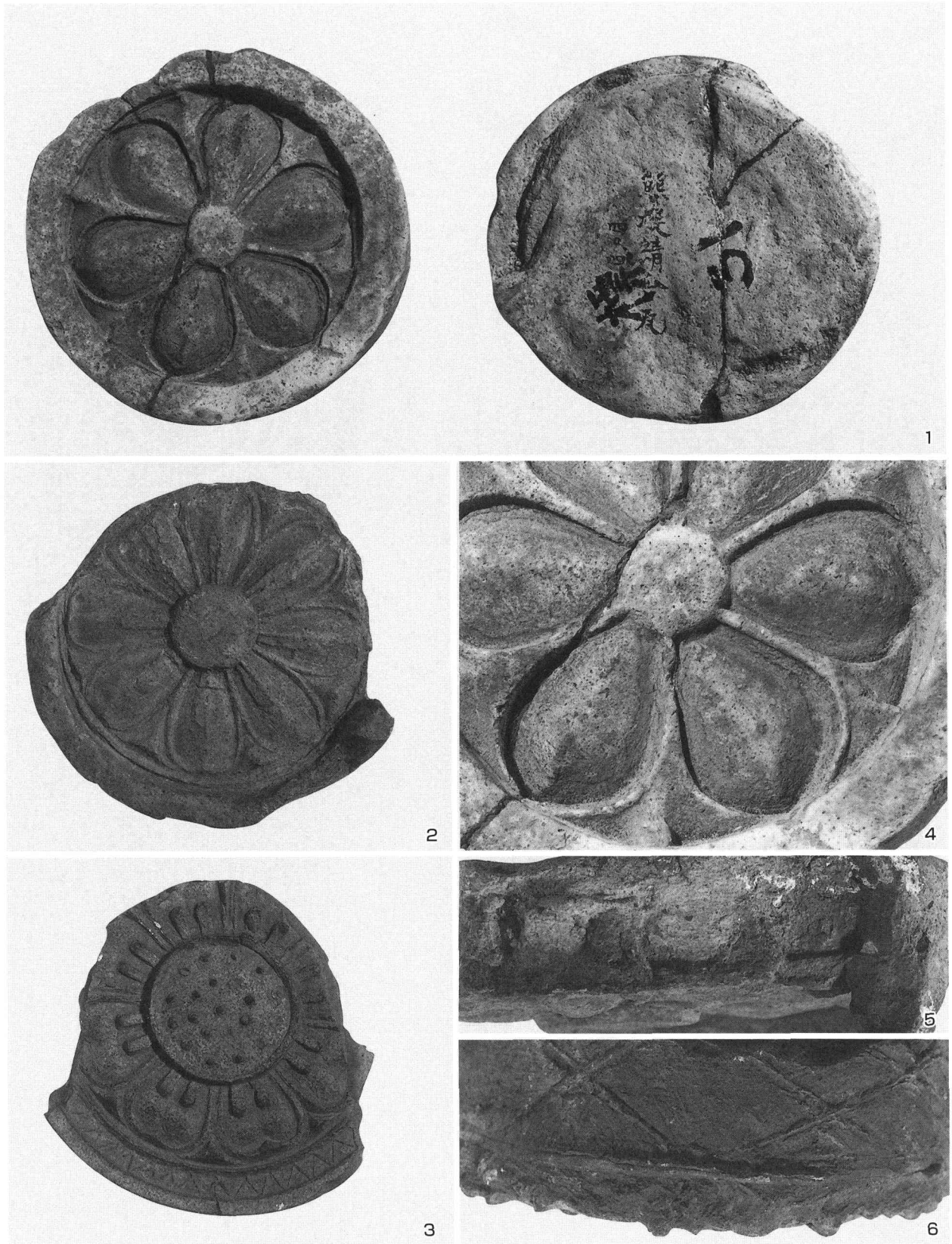
1:3



62



額田寺出土瓦



額田寺出土瓦写真

1 図I-3 (表・裏)

4 図I-3 (拡大)

6 図II-10の丸瓦先端加工の圧痕

2 図I-7

5 図I-7丸瓦先端加工の圧痕

3 図II-10

縮尺不同



1 図V-43

2 図Ⅲ-18

3 図V-43 (拡大)

4 図Ⅲ-18の瓦当裏面 丸瓦接合状態

5 図Ⅲ-18 (拡大)

6 図版VII-62 (表・裏)

縮尺不同

額田寺出土瓦写真

註

(1)——たとえば、明日香村の川原寺出土と伝える[保井1932-図版第15(疏瓦1)]は、川原寺の創建を古く考える根拠にもなっていたが、発掘調査ではまったく出土していない。なお、[保井1932]所収の「飛鳥寺出土」の瓦に他寺の出土瓦が混入している事実は、太田三喜が検討している[太田1995]。

(2)——たとえば明日香村の大官大寺の第6次調査で、新庄町の慈光寺と同范の鬼面紋軒丸瓦が1点だけ出土している。

(3)——かつて、平安時代後期の軒瓦の瓦当紋様が、高麗に遡源すると論じたときは、①②の手続きはクリアできたが、③はまだ課題として残したままになっ

ている[上原1980]。

(4)——この軒丸瓦は、かつて漢城時代(475年以前)の百濟故城所用瓦として注目を集め、同じ遺跡で採集された平瓦や丸瓦に至るまで分析された[朴1976]。井内功はその成果をさらに深めて、同遺跡の軒平瓦や平・丸瓦は、統一新羅時代を中心とした広い時代のもので混在し、問題の軒丸瓦も泗泚時代(538~660年)まで降ると考えた[井内1977]。泗泚時代には、清潭洞遺跡の地は新羅の版図に含まれるので、この軒丸瓦は「いわゆる高句麗系」[稲垣1981]や「高句麗新羅様式」[亀田1994]と呼ばれるようになった。

参考文献

- 青木勘時・杉浦隆支 1994年「古新羅系瓦の新例」『古文化談叢』第32集,九州古文化研究会
飛鳥資料館 1981年『山田寺展』資料館図録第8冊,奈良国立文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1988年「奥山久米寺の調査(1987-1次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報18』奈良国立文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1992年「坂田寺第7次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』奈良国立文化財研究所
天沼俊一 1921年『三K会図集 古瓦集』
安藤鴻基 1980年「房総七世紀の一姿相」『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会
井内 功 1977年「ソウル特別市清潭洞遺跡と出土古瓦について」『井内古文化研究室報』19
石田茂作 1930年『古瓦図鑑』
石田茂作 1936年『飛鳥時代上代寺院址の研究』
石田茂作 1944年「飛鳥時代の古瓦」『總説飛鳥時代寺院址の研究』
稲垣晋也 1981年「新羅の古瓦と飛鳥・白鳳時代古瓦の新羅的要素」『新羅と日本古代文化』
稲垣晋也ほか 1991年『国指定史跡 北野麩寺』岡崎市教育委員会
岩井孝次 1936年『古瓦集英』
上田 睦 1997年「中南河内の古代寺院」『撰河泉の古代寺院とその周辺』第1回撰河泉古代寺院フォーラム,撰河泉文庫
上原真人 1980年「十一・十二世紀の瓦当文様の源流(上)(下)」『古代文化』32-5・6,(財)古代学協会
上原真人 1996年『蓮華紋』日本の美術第359号,至文堂
太田三喜 1995年「伝・飛鳥寺出土の瓦」『天理参考館報』第8号
梶川敏夫ほか 1976年『北白川麩寺塔跡発掘調査報告』京都市文化観光局文化財保護課
堅田 修 1958年「額安寺出土の古瓦について」『日本上古史研究』2-2
狩野 久 1984年「額田部連と飽波評」『日本古代政治社会史研究』上巻,岸俊男教授退官記念会編,塙書房(後に『日本古代の国家と都城』1990年,東京大学出版会に所収)
亀田修一 1991年「ある高句麗系瓦」『交流の考古学』肥後考古学会
亀田修一 1994年「瓦から見た畿内と朝鮮半島」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5,名著出版
川畑聰ほか 1996年『第11回特別展 讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館
京都国立博物館 1974年『瓦と埴図録』
京都国立博物館 1990年『畿内と東国の瓦』
京都大学文学部 1968年『考古学資料目録2』
小林康幸 1989年「関東地方における中世瓦の一樣相—中世都市鎌倉と周辺地域にみる系譜性を中心として—」『神奈川考古』第25号,神奈川考古同人会
斎藤 忠 1939年「慶州付近出土の単弁蓮花文古瓦の一型式」『夢殿』第18号,綜合古瓦研究(『新羅文化論攷』1973年所収)

- 白石太一郎 1978年「広陵町寺戸廃寺とその屋瓦」『青陵』37, 橿原考古学研究所
- 菅井敏美・西村俊範 1987年『黒川古文化研究所 収蔵品目録 第13日本古瓦一付・朝鮮古瓦・埴』
- 関野 貞 1901年「古瓦模様沿革考2」『考古界』1-7 (『建築雑誌』160号, 1900年と同内容)
- 関野 貞 1902年「古瓦模様沿革考4」『考古界』2-6 (『建築雑誌』186号, 1902年と同内容)
- 関野 貞 1928年『瓦』雄山閣考古学講座(後に、「日本古瓦文様史」と改題し『日本の建築と芸術』上巻, 1940年所収)
- 杉本 宏ほか 1983年『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第3集, 宇治市教育委員会
- 田村吉永 1938年「額安寺草創所見」『大和志』第5巻第12号, 大和国史会
- 忠南大学百済研究所 1972年『百済瓦埴図譜』(日本語版『百済の古瓦』1975年, 学生社)
- 土浦市立博物館 1997年「中世の霞ヶ浦と律宗一よみがえる仏教文化の聖地」第18回特別展図録
- 中井 公 1997年「大安寺式軒瓦の年代」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- 奈良国立博物館 1960年『飛鳥白鳳の古瓦』
- 奈良国立博物館 1993年『奈良国立博物館蔵品目録 仏教考古 瓦』
- 奈良国立文化財研究所 1960年『川原寺発掘調査報告』学報9冊
- 奈良国立文化財研究所 1987年『薬師寺発掘調査報告』学報第45冊
- 奈良国立文化財研究所 1991年『平城宮発掘調査報告Ⅲ-内裏の調査Ⅱ-』学報第50冊
- 奈良国立文化財研究所 1992年『法隆寺の至宝 第15巻 瓦』法隆寺昭和資財帳編集委員会
- 奈良市教育委員会 1997年『史跡 大安寺旧境内Ⅰ-杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告-』奈良市埋蔵文化財調査研究報告 第1冊
- 橋本伊知郎 1957年「明星池(額安寺)より発見された瓦について」『日本上古史研究』1-11
- 八王子市郷土資料館 1982年『井上コレクションの古瓦』特別展図録
- 花谷浩・佐川正敏 1991年「飛鳥・白鳳の軒平瓦について」『伊珂留我-法隆寺昭和資財帳調査概報-』13, 法隆寺昭和資財帳編集所
- 花谷浩・佐川正敏他 1994年「山田寺出土瓦の調査」『奈良国立文化財研究所年報1994』
- 羽曳野市教育委員会 1995年「西琳寺跡」『古市遺跡群Ⅲ』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 32
- 菱田哲郎 1994年「瓦当文様の創出と七世紀の仏教政策」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5, 名著出版
- 福山敏男 1948年「額田寺(額安寺)」『奈良朝寺院の研究』高桐書院
- 藤沢一夫 1961年「日鮮古代屋瓦の系譜」『世界美術全集第2巻 日本(2) 飛鳥・白鳳』
- 朴 容埴 1976年「ソウル三成洞出土古瓦」『考古美術』129・130号, 韓国美術史学会
- 前園実知雄 1979年「大和郡山市額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1978年度』
- 前園実知雄 1980年「大和郡山市額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1979年度』
- 前園実知雄 1986年「大和郡山市額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1985年度』
- 前田晴人 1991年「額田部連の系譜と職掌と本拠地」『日本歴史』第520号, 吉川弘文館
- 森 郁夫 1983年「瓦と古代寺院」六興出版
- 森 郁夫 1990年「瓦当文様に見る古新羅の要素」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 毛利光俊彦 1980年「日本古代の鬼面文鬼瓦-8世紀を中心として-」『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報第38冊
- 保井芳太郎 1928年『大和古瓦図録』
- 保井芳太郎 1932年『大和上代寺院志』
- 山川 均 1993年『額田寺旧境内表採軒瓦調査報告(額田寺関連文化財調査報告1)』大和郡山市文化財調査概要 34
- 山本忠尚 1984年「大安寺の屋瓦」『大安寺史・史料』大安寺

図版と出典の一覧 (* 印は出典の拓本と図をそのまま転載した)

- 図Ⅰ-1 素弁六葉蓮華紋軒丸瓦 [橋本 1957] [奈博 1960-58] [山川 1993-1] *
- 2 素弁六葉蓮華紋軒丸瓦 [山川 1993-2] *
- 3 素弁六葉蓮華紋軒丸瓦 [天沼 1921-図版第11 (1)]
- 4 素弁六葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1932-図版第53 (疏瓦4)] [石田 1936-図版第153 (1)]
- 5 素弁六葉蓮華紋軒丸瓦 [奈博 1993-軒丸瓦71]
- 6 単弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1932-図版第53 (疏瓦3)] [石田 1936-図版第153 (2)]
- 7 単弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [京都大学総合博物館所蔵]
- 8 単弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1928-図版 第15 (2)]
- 図Ⅱ-9 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [奈博 1960-261] [京博 1974-25]

-
- 10 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [京大文学部 1968-NARA039]
11 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1928-図版 第30 (1)] [保井 1932-図版 第53 (疏瓦1)] [石田 1936-図版153 (4')]
12 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [関野 1928-159] [石田 1936-図版 第153 (4)] *
13 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [関野 1901-第3図] [関野 1928-157・158] [石田 1936-図版 第153 (3)] [奈博 1960-260] *
14 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1928-図版 第28 (3)] [保井 1932-図版 第53 (疏瓦2)] [石田 1936-図版 第153 (3')]
15 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [菅井・西村 1987-113]
16 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [奈博 1960-262] 擬古作
図Ⅲ-17 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1928-図版 第17 (1)] [保井 1932-図版 第54 (疏瓦13)]
18 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [天沼 1921-図版 第18 (1)]
19 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [石田 1936-図版 第154 (7)] [山川 1993-3] *
20 複弁九葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1928-図版 第16 (2)] [保井 1932-図版 第54 (疏瓦10)] [石田 1936-図版 第154 (12)]
21 単弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1932-図版 第53 (疏瓦5)] [石田 1936-図版 第154 (9)]
22 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1932-図版 第54 (疏瓦12)] [石田 1936-図版 第153 (6)]
23 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [岩井 1936-図版 第22 (110)] [石田 1936-図版 第153 (5)] *
24 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [石田 1936-図版 第155 (15)] *
25 複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1932-図版 第54 (疏瓦11)] [石田 1936-図版 第154 (8)]
図Ⅳ-26 唐草紋縁単弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1928-図版 第16 (1)] [保井 1932-図版 第53 (疏瓦6)]
27 唐草紋縁単弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [天理参考館所蔵・保井コレクション]
28 唐草紋縁単弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [山川 1993-8] *
29 唐草紋縁単弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [前園 1980-図5 (1)] *
30 唐草紋縁単弁八葉蓮華紋軒丸瓦 [山川 1993-5] *
31 単弁十六葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1932-図版 第53 (疏瓦8)] [石田 1936-図版 第154 (11)]
32 単弁十葉蓮華紋軒丸瓦 [石田 1936-図版 第154 (14)] *
33 単弁十葉蓮華紋軒丸瓦 [保井 1928-図版 第17 (2)] [保井 1932-図版 第53 (疏瓦9)] [石田 1936-図版 第155 (14')]
34 単弁蓮華紋軒丸瓦 [石田 1936-図版 第155 (17)]
35 単弁十葉蓮華紋軒丸瓦 [石田 1936-図版 第154 (13)] *
36 蓮華紋軒丸瓦 [石田 1936-図版 第155 (16)] *
37 [南無阿弥陀仏] 銘軒丸瓦 [石田 1936-図版 第155 (18)] *
図Ⅴ-38 手彫り唐草紋軒平瓦 [前園 1979-図6 (1)] *
39 三重弧紋軒平瓦 [天理参考館所蔵・保井コレクション]
40 均整忍冬唐草紋軒平瓦 [前園 1979-図6 (2)] *
41 均整忍冬唐草紋軒平瓦 [石田 1936-図版 第155 (19⁺)] [山川 1993-10] *
42 均整忍冬唐草紋軒平瓦 [京都大学文学部考古学研究所蔵拓本]
43 均整忍冬唐草紋軒平瓦 [天沼 1921-図版 第35 (3)] [関野 1928-176]
44 均整忍冬唐草紋軒平瓦 [奈博 1960-487] [京博 1974-55]
45 均整忍冬唐草紋軒平瓦 [保井 1932-図版 第54 (華瓦1)] [石田 1936-図版 第155 (19⁺)]
46 均整忍冬唐草紋軒平瓦 [保井 1932-図版 第54 (華瓦2)] [石田 1936-図版 第155 (19)]
47 偏行唐草紋軒平瓦 [石田 1936-図版 第155 (20)] *
48 蓮弁紋軒平瓦 [石田 1936-図版 第156 (24)]
49 均整唐草紋軒平瓦 [石田 1936-図版 第156 (23)] *
50 均整唐草紋軒平瓦 [山川 1993-12] *
図Ⅵ-51 均整唐草紋軒平瓦 [前園 1980-図7 (2)] *
52 均整唐草紋軒平瓦 [前園 1979-図6 (3)] *
53 均整唐草紋軒平瓦 [前園 1980-図5 (2)] *
54 均整唐草紋軒平瓦 [保井 1928-図版 第42 (2)] [保井 1932-図版 第54 (華瓦3)]
55 蓮唐草紋軒平瓦 [保井 1932-図版 第54 (華瓦5)] [石田 1936-図版 第156 (26)]
56 蓮唐草紋軒平瓦 [保井 1932-図版 第54 (華瓦4)] [石田 1936-図版 第156 (25)]
57 蓮唐草紋軒平瓦 [前園 1980-図7 (4)] *
58 均整唐草紋軒平瓦 [前園 1979-図6 (4)] *
図Ⅶ-59 蓮唐草紋軒平瓦 [菅井・西村 1987-763]
-

-
- 60 巴紋軒丸瓦 [前園 1980-図5 (3)] *
- 61 素弁六葉蓮華紋鬼板 [菅井・西村 1987-857] 擬古作
- 62 鬼面紋鬼板 [京大文学部 1968-NARA040]
- 図Ⅶ-1 図Ⅰ-3 写真 (表・裏)
- 2 図Ⅰ-7 写真
- 3 図Ⅱ-10 写真
- 4 図Ⅰ-3 写真 (部分拡大)
- 5 図Ⅰ-7の丸瓦先端加工の圧痕 (写真)
- 6 図Ⅱ-10の丸瓦先端加工の圧痕 (写真)
- 図Ⅷ-1 図Ⅴ-43 写真
- 2 図Ⅲ-18 写真
- 3 図Ⅴ-43 写真 (部分拡大)
- 4 図Ⅲ-18の瓦当裏面の丸瓦接合状態 (写真)
- 5 図Ⅲ-18 写真 (部分拡大)
- 6 図Ⅶ-62 写真 (表・裏)

(京都大学大学院文学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(1999年8月26日 審査終了受理)

(追記)

- (1) 脱稿後, 太田三喜「額安寺の瓦-飛鳥・白鳳期-」『天理参考館報』第11号 (1998年10月) において, 保井コレクションの額田寺出土瓦が紹介された。合せて御参照いただきたい。
- (2) 花谷浩氏の御教示によれば, 額田寺の創建を示す素弁六葉蓮華紋軒丸瓦 (図Ⅰ-1~5) に酷似した瓦が, 檀原市和田廢寺 (推定葛城寺, 葛木尼寺) から出土しているとの由。額田寺の創建と飛鳥地域との関わりを想定させる重要な指摘である。
- (3) 本文中で10世紀の擬古作と考えた図Ⅱ-16は, 丸瓦部凸面にも布目圧痕が付着する点が平安京や法隆寺の「横置型一本作り」と異なり, 技法から導いた年代観にも疑問があった。最近, 近代の擬古作 (レプリカ) で瓦当裏面や丸瓦部凸面に布目圧痕が付着する一群の軒丸瓦に遭遇した。それらの外見や焼成は図Ⅱ-16とは異なり, その製作技法自体も判然としない。しかし, 図Ⅱ-16の年代観は保留し, 今後の検討に委ねるのが穏当であろう。

Review of the Roof-tiles Excavated at the Nukata-dera

UEHARA Mahito

As to the roof-tiles used for the construction of the temple complex, our knowledge is extremely limited as no excavation has ever been conducted at the center of the Nukata-dera cloister. This study examines the history of the Nukata-dera based on the second-class data, such as surface-collected roof-tiles.

The roof-tiles used for the original construction of the Nukata-dera temple were traditionally attributed to *koshiragi*, although it is disputable. The tiles produced in later days were widely distributed in the Nakakawachi region but not found in other temples in the Ikaruga region. This indicates that the founder clan of the Nukata-dera was involved in shipping on the Yamato river.

Judging from the style of the collected roof-tiles, the ancient Nukata-dera was founded in the early seventh century and completed by the end of the seventh century. The progress is the same as the other temples in Ikaruga region, namely, Horyu-ji, Horin-ji, and Hokki-ji temples. Although each temple has a unique ornamental pattern on its eaves tiles, the majority of the temples in the Ikaruga region commonly adopted the Horyu-ji type, which fact indicates the presence of the Ikaruga culture in the last years of the seventh century.

The map of the Nukata-dera depicts the temple complex composed of two corridors extending from the middle gate to the main hall, to create space for ceremony between the middle gate and the main hall. This arrangement, established after the moving of Heijo palace in the eighth century, was significantly different from those of other temples in Ikaruga region.

Among a wide variety of roof-tiles used for the Nukata-dera, two main styles can be recognized; the round eaves tiles with arabesque patterns and flat eaves tiles related to the Heijo palace. They would have been linked to the arrangement of the temple cloister depicted in the map of the Nukata-dera.

The temple complex in the map shows either that the temple was originally founded by the end of the seventh century and was completely rebuilt in the middle of eighth century, or that the plan was partly changed from its original arrangement.